

令和7年度全国水産試験場長会全国大会（香川県）

要 録



栗林公園開館150周年



期 日：令和7年11月18日（火）

会 場：栗林公園 商工奨励館

香川県高松市栗林町一丁目20番16号

主 催：全国水産試験場長会

目次

1	大会の構成	
(1)	大会日程	1
(2)	大会次第	2
(3)	出席者名簿	3
2	挨拶	
(1)	会長	5
(2)	来賓	7
(3)	開催県	12
3	報告	
(1)	会長報告	13
(2)	令和6年度活動結果・令和7年度活動計画について(資料1)	16
(3)	国への要望「地域の抱える懸案事項」等について(資料2)	23
4	情報交換	
	・秋田県における内水面漁業の課題	26
5	話題提供	
	・香川県の水産業と試験研究について	28
6	優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰	
(1)	審査委員長経過報告・講評	33
(2)	副賞贈呈・挨拶	37
(3)	会長賞受賞記念講演	
	①宮崎県	39
	②宮城県	43
	③北海道	49
7	日本水産学会・全国水産試験場長会 合同シンポジウムについて	54
8	その他	57
9	次年度開催県	58
10	現地意見交換会	59
11	関係写真	60

1 大会の構成

(1) 大会日程

大会行事	開催日時・開催場所
全国大会	令和7年11月18日 13:30~17:00 栗林公園 商工奨励館
現地意見交換会	令和7年11月19日 8:30~12:00 香川大学 庵治マリンステーション（高松市） 金刀比羅宮（仲多度郡琴平町）

令和7年度全国水産試験場長会全国大会（香川県）

次 第

日時 令和7年11月18日（火）13:30～17:00

場所 栗林公園 商工奨励館

- 1 開会
- 2 挨拶
 - (1) 会 長
 - (2) 来 賓
- 3 報告
 - (1) 令和6年度活動結果・令和7年度活動計画について
 - (2) 国への要望「地域の抱える懸案事項」等について
- 4 情報交換
秋田県における内水面漁業の課題
- 5 話題提供
香川県の水産業と試験研究について
- 6 優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰式
 - (1) 審査委員長経過報告・講評
 - (2) 会長賞表彰式
 - ・会長賞表彰
 - ・副賞贈呈（地域水産試験研究等促進奨励会）
 - (3) 会長賞受賞記念講演
 - ①「環境DNAを用いたかつお一本釣漁場探索手法の開発と実践」
宮崎県水産試験場 経営流通部
主任研究員・上林 大介
 - ②「マボヤの貝毒対策に関する研究」
宮城県水産技術総合センター 気仙沼水産試験場
主任研究員 田邊 徹
 - ③「網走湖の塩分環境保全とヤマトシジミ資源の回復」
網走水産試験場 調査研究部
主査 渡辺智治
- 7 日本水産学会・全国水産試験場長会 合同シンポジウムについて
- 8 その他
- 9 閉 会

(3)出席者名簿

○来賓

	機 関 名 称	役 職 名	氏 名
国等関係機関	水産庁 研究指導課	課長	松田 竜太
	水産庁 研究指導課	課長補佐(企画調整)	岡本 康孝
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構	理事長	中山 一郎
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 本部研究戦略部	研究戦略部長	桑原 隆治
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 本部研究戦略部	研究推進コーディネーター	清水 智仁
	(公社)日本水産学会	会長	東海 正
	地域水産試験研究等促進奨励会/(一社)全国水産技術協会	代表	和田 時夫

○海面

北海道	(地独)北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場	本部長兼場長	星野 昇
	(地独)北海道立総合研究機構 網走水産試験場	場長	畑山 誠
東北	(地独)青森県産業技術センター 水産総合研究所	所長	吉田 達
	岩手県水産技術センター	企画指導部長	藤村 崇
	宮城県水産技術総合センター	所長	和泉 祐司
	宮城県水産技術総合センター	主任研究員	田邊 徹
	福島県海洋研究センター	所長	山廻邊 昭文
東北・東海	茨城県水産試験場	場長	高橋 正和
北部日本海	秋田県水産振興センター	所長	中林 信康
	秋田県水産振興センター 総務企画室	総務企画室長	斎藤 和敬
	秋田県水産振興センター 総務企画室	主査	保坂 芽衣
	新潟県水産海洋研究所	所長	樋口 正仁
	富山県農林水産総合技術センター水産研究所	所長	辻本 良
	石川県水産総合センター	所長	木本 昭紀
東海	千葉県水産総合研究センター	センター長	玉井 雅史
	東京都島しょ農林水産総合センター	所長	中野 卓
	神奈川県水産技術センター	所長	石黒 雄一
	静岡県水産・海洋技術研究所	所長	高木 康次
	愛知県水産試験場	場長	岡田 元
	三重県水産研究所	所長	青木 秀夫
東海・瀬戸内海	和歌山県水産試験場	場長	奥山 芳生
瀬戸内海	(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所水産技術センター	水産研究部長	山本 圭吾
	兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター	所長	山下 正晶
	岡山県農林水産総合センター 水産研究所	所長	鳥井 正也
	広島県立総合技術研究所 水産海洋技術センター	センター長	若野 真
	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課	課長	山本 浩二
	愛媛県農林水産研究所水産研究センター	センター長	渡邊 昭生
	高知県水産試験場	場長	西山 勝
	福岡県水産海洋技術センター 豊前海研究所	所長	江藤 拓也
西部日本海 九州・山口	山口県水産研究センター	所長	澁谷 賢司

西部日本海	鳥取県水産試験場	場長	石原 幸雄
	鳥取県栽培漁業センター	所長	丹下菜穂子
	島根県水産技術センター	所長	道根 淳
	京都府農林水産技術センター海洋センター	研究部長	宮嶋 俊明
	京都府農林水産技術センター海洋センター	総括主任研究員	久田 哲二
九州・山口	福岡県水産海洋技術センター	所長	秋本 恒基
	福岡県水産海洋技術センター 有明海研究所	所長	藤井 直幹
	佐賀県有明水産振興センター	所長	中島 則久
	佐賀県玄海水産振興センター	所長	山浦 啓治
	長崎県総合水産試験場	場長	森川 晃
	熊本県水産研究センター	所長	山下 武志
	熊本県水産研究センター	審議員兼次長	脇上 哲也
九州・山口 瀬戸内海	大分県農林水産研究指導センター水産研究部 北部水産グループ	グループ長	宮村 和良
	宮崎県水産試験場	場長	大村 英二
	宮崎県水産試験場	経営流通部長	神柱 武志
	宮崎県水産試験場	主任研究員	上林 大介
九州・山口	鹿児島県水産技術開発センター	所長	外城 和幸
	沖縄県水産海洋技術センター	所長	上田 美加代

○内水面

東北・北海道	(地独)青森県産業技術センター 内水面研究所	所長	伊藤 欣吾
関東・甲越	群馬県水産試験場	場長	田中 英樹
	埼玉県水産研究所	所長	小川 和泰
	新潟県内水面水産試験場	場長	佐藤 将
	山梨県水産技術センター	所長	岡崎 巧
東海・北陸	岐阜県水産研究所	所長	後藤 功一
西日本	滋賀県水産試験場	場長	酒井 明久
	高知県内水面漁業センター	所長	織田 純生

○開催県

事務局	香川県農政水産部	部長	桑原 仁
	香川県農政水産部	次長	柏山 浩史
	香川県農政水産部水産課 漁業調整室	室長補佐	藤原 宗弘
	香川県農政水産部水産課 漁業振興・流通グループ	主任技師	吉田 真子
	香川県水産試験場	場長	三木 勝洋
	香川県水産試験場 総務課	課長	新上 洋子
	香川県水産試験場 環境・資源研究課	課長	加賀田 薫
		主任研究員	小川 健太
		主任研究員	長谷川 尋士
	香川県水産試験場 増養殖研究課	課長	中山 博志
		主任研究員	原 佐登子
		主任研究員	宮城 良介
主任研究員		藤田 辰徳	
香川県水産試験場 栽培漁業センター	主席研究員	高砂 敬	

2 挨拶

(1) 会長

全国水産試験場長会会長(宮崎県水産試験場長) 大村 英二

みなさん、こんにちは。昨年度から全国水産試験場長会の会長を務めております、宮崎県水産試験場長の**大村**でございます。

令和7年度全国水産試験場長会の開会にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

まずは、会員の皆様には令和7年度全国水産試験場長会全国大会にご参集いただき、感謝申し上げます。また、日頃よりご支援・ご指導を賜っております水産庁研究指導課長の松田竜太様、水産研究・教育機構理事長の中山一郎様、日本水産学会会長の東海正様、全国水産技術協会会長の和田時夫様、香川県農政水産部長の桑原仁様をはじめ、多数のご来賓の方々にもご多忙の中、当大会へご出席いただきまして、誠にありがとうございます。この場をお借りしまして、厚くお礼申し上げます。

さて、今年度も8月に発生した豪雨災害により、特に熊本県を中心として全国各地での被害、これ以外にも全国で多発する大雨による被害など、多くの災害が発生しております。被害を受けられました方々には、心からお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を願っております。

昨年度の挨拶でも申し上げましたが、ここ数年間の歴代会長の全国大会での挨拶では、毎回冒頭に災害の話に触れており、これはもはやリスクというより常態化している状況といっても過言ではないと感じております。

このような異常気象の常態化の中で、それぞれの地域の水産業の成長産業化を実現していくためには、水産庁や水産研究・教育機構などとの一体的な施策や研究開発の必要性が、過去にないほど重要性を増しているのではないかと感じております。

私自身、一水産試験場長として、今まで諸先輩方が築き上げた既存の漁業、既存の施策、あるいは既存の試験研究の延長線上で胡座をかいて仕事をしてきてしまったと反省しているところであります。

このため、試験研究で言えば、10年、20年先を考えた取り組みが必要と考え、毎年の試験研究課題の見直しに際しては、今本県にはない漁業の導入、あるいは災害に影響されない漁業を素材にしたものなど、チャレンジングな試験研究課題の設定にも取り組んでいるところであります。

全国水産試験場長会の話に戻しますが、ご案内のとおり、当会は約70年に及ぶ歴史を有しており、この全国大会は平成23年度から開催されております。

全国大会では、後ほど、審査委員長を務めていただきました北海道の星野本部長より

報告がございますが、今大会においても三つの業績を表彰するとともに、それぞれの研究について記念講演をいただくこととしております。

また、受賞者の方々には、地域水産試験研究等促進奨励会様から副賞を頂いております。今回は対象者がございませんが、日本水産学会の東海会長様のお計らいにより、40歳未満の研究者を対象とした農林水産技術会議の若手農林水産研究者表彰にも応募しております。

このような機会は、地方の研究者の一層の意欲向上につながると考えておりますので、奨励会の皆様並びに東海会長様には心から感謝申し上げます。

最後になりますが、本大会は年に一度、会員や関係者が一同に会する貴重な機会でありますので、有意義な大会となりますよう、皆様のご協力をいただくとともに、本大会の開催にあたりまして、多大なご尽力をいただきました香川県水産試験場の三木場長様をはじめ、職員の皆様方に心から御礼を申し上げまして、開会の挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

(2) 来賓

水産庁増殖推進部研究指導課長 松田 竜太

水産庁で研究指導課長を務めております松田竜太でございます。本日ここに、令和7年度全国水産試験場長会全国大会が開催されるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

はじめに、ご出席の皆様方におかれましては、水産業の振興を図るため、日頃より試験研究および技術開発の推進にご尽力いただき、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

また、本全国大会の開催準備にご尽力いただいた香川県の関係者の皆様にも、重ねてお礼申し上げます。

さて、昨今の劇的な海洋環境の変化による水産業全体への影響に鑑み、本年6月に自民党の水産総合調査会および水産部会が、小泉前農水大臣に「水産政策の新たな展開に関する提言～豊かな浜と強い漁業を未来につないでいくための水産業強靱化計画の策定に向けて」という提言書を提出されました。この提言書の冒頭には、「これまでと同じやり方では我が国の漁業は成り立たない、変革しなければ生き残れない、まさに漁業は危機的な状況にある。」とあり、その対策として、第一に「海洋環境変化の的確な把握と精度の高い資源評価に基づく資源管理の早急な実施」と記載されています。

皆様方におかれましては、かつてないほどに獲れなくなってしまった魚種があったり、突然豊漁となる魚種があるなど、これまで以上に将来の予測が難しく、調査研究や技術開発を計画的に実施することには大変なご苦労があることと思います。昨今では、スルメイカの漁獲枠の問題や、特に瀬戸内海におけるカキの大量へい死など、例を挙げればきりがありませんが、ご紹介した提言書の一番初めに記載されているとおり、地道に継続いただいている資源調査や技術開発は、これまで以上にその重要性が高まっていると考えております。

我が国が引き続き資源管理の科学的根拠となる資源調査・評価を着実に実施するとともに、その高度化に取り組んでいくことは、関係都道府県の水産試験場の皆様のご協力なくしては成し得ません。水産庁としましても、関係都道府県のご協力を仰ぎながら、これまで以上に皆様と連携して取り組んで参りたいと考えております。

最後になりますが、本日会長賞を受賞される方々をはじめ、ご出席の皆様方のご活躍とご健勝、また本日の大会が実り多いものとなるよう祈念しまして、私のご挨拶とさせていただきます。

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 理事長 中山 一郎

皆様こんにちは。本日は令和7年度の全国水産試験場場長会全国大会開催、誠にありがとうございます。そしてお招きいただきまして、誠にありがとうございます。私ども普段より大村会長様はじめ場長会の皆様、それから今回この会を運営されている三木場長様はじめ香川県の方々には、本当にいつもお世話になっております。ありがとうございます。

現在、水産をめぐる状況というのは、非常に大きな環境の変化、それも大きな地球環境の変化だけではなく、さらに社会全体の変化も大きくなってきているところがございます。食糧安全保障の観点からも大きな転換点を迎えているのではないかとというふうに考えているところがございます。

さらに先ほどありましたけれども、日本は、震災、豪雨と脆弱な環境の中にあります。

7月30日には遠いカムチャッカ半島付近の地震に伴う津波による養殖施設への被害までありました。それから8月、9月にかけては局地的豪雨、それから突風、台風被害、その他日本各地でも大きな被害があり、水産全体にも大きな影響があります。被害に遭われた方々にはお見舞い申し上げます。研究サイドでもこれらの対応として、何か備えていけることがあるのではないかと強く思っているところでもあります。

ここで少しお時間をいただきまして、我々の情勢報告をごく簡単にさせていただきたいと思えます。まず、一つ目でございます。令和7年度の全国水産業関係研究会の推進会議です。これは、水研機構が開催する会議でございますが、来年の2月17日（火曜日）、ビジョンセンター品川で開催することとしましたので、ぜひともご参加をお願いしたいと思います。今回も対面とWeb、両方で行います。以前は場長会の幹事の方々のみが対面でしたので、数少ない会議でしたけれども、Web併用ということで昨年も数多くの方々にご参加いただきまして、誠にありがとうございました。ぜひとも皆様のご参加をお願いしたいと思います。

二つ目です。10月15日に水素燃料電池漁船「ZERO-E 黒瀬」という船が就航し、10月16日より実証試験を開始したところがございます。この船は、水素を供給して空気中の酸素との化学反応で発生した電気を使って推進モーターを稼働させる、電動の船でございます。また、余剰電力はリチウムイオン蓄電池に蓄電することができまして、スラスタだとか給餌用ブローアをこの電池で稼働することができるという仕組みになっております。給餌作業のほとんどがゼロエミッション化で行けるといって船でございます。これが就航したということで、水産業はCO2排出が非常に大きな産業でございますけれども、「ZERO-E 黒瀬」が出来上がって実証に向かったというのは大きな一歩だと思っております。

三番目としては第22回成果報告会ですけれども、9月19日、横浜市にある神奈川県公会堂で開催いたしました。対面は83名、Webは198名、総勢281名のご参加をい

いただきました。皆様と機構の研究成果について活発な情報交換ができたというふうに思っております。

また、10月2日には水産増養殖産業イノベーション創出プラットフォームの中の令和7年度勉強会・技術提案会を開催いたしました。こちらは対面45名、Web75名、総勢120名の参加をいただきまして、2題の講演、7つの技術提案が行われて、そのあと、非常に活発な意見交換が行われました。まさにこれは新しい産業を作るといったプラットフォームの中での話で、水産業とあまり関係ないと思われる企業の方々も数多く参加していただいたという会でございます。また、提案会開催後の交流会では参加者同士のコミュニケーションから新たな研究の種が生まれたようでございます。

四番目ですけれども、本年度のPICESの本会議が、今年は日本が開催国ということで6か国持ち回りですが、11月8日から16日、先週横浜で開催いたしました。今回は70名近い参加者ということで、PICES 始まって以来の参加者数で大盛況でございました。PICES は日本、カナダ、中国、韓国、ロシア、米国の6か国の政府や研究機関などが参加する機関で、北太平洋における海洋科学研究の推進、海洋環境、気候変動、資源、生態系、人間活動の影響に関する科学的知見の共有と交換などを目的とした会議でございます。さらに、日仏海洋学会と水研機構で共同シンポジウムを三重県の鳥羽で11月26日、来週から30日まで予定しているところで、昨年引き続き機構として国際関係も力を入れているところでございます。東南アジアのSEAFDECなどMOUを締結した海外機関とも連携して、海は世界中つながっていて同じような被害、変化があるということで連携を強めているところでございます。

そういうところで、本日は本当に盛大な全国大会おめでとうでございます。水産のさらなる振興に向けて、我々はやはり現場との絆が最も大切だというふうに思っていますので、場長会の方々との連携をさらに深めるためにも、今回のこの会議が実り多い会となることを祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

皆さん、こんにちは。日本水産学会会長の東海でございます。令和7年度全国水産試験場長会全国大会の開催、誠に喜び申し上げます。大村会長はじめ場長会の皆様、また今回の会議をご準備いただいた香川県水産試験場の皆様に、お礼申し上げたいと思います。また、このようなご挨拶の機会をいただきまして、ありがとうございます。

すでに多くのご挨拶中でありましたように、水産業を取り巻く環境というのは非常に厳しい中、全国の水産試験場長会の皆様、各試験場で解決に向けてそれぞれ試験研究を進められていると思います。その中で一つ、うれしいお知らせをさせていただきます。まずは、昨年度この場長会賞を受賞された愛知県水産試験場の稲葉さんが、今年度の若手農林水産研究者表彰、農林水産技術会議会長賞を見事に受賞されたということでございます。公設試では、農業関係、園芸、その他畜産関係ではかなり受賞者が出てきているのですが、実は水産試験場からは、私の記憶する限り今まで受賞者がいなかったところですので、今回初めて受賞されたということで、ぜひ、場長会賞を取っているからというわけではなく、すばらしい研究があれば、各県の水産試験場から若手を推薦していただき、賞を取っていただき、多くの方々に、身内含めて我々大学の学生たちにも見せてやってもらいたいと思っております。

それは後ほどにも少し触れたいと思いますが、学生たちが「水産試験場がどういう仕事をしているのだろう」「何が水産業の中で課題になっているのか」、大学の先生達の授業が悪いのかもしれないですが、ちゃんと伝えきれていないのかもしれない。そうしますと、やはり学生たちが将来、自分の仕事をどこに求めようかという時に、水産試験場というところが目に入ってくるように、活躍している姿をどんどん見せていただくことが、今必要ではないかと思っております。

日本の研究ということになりますと、マスコミなどでもよく取り上げられていると思いますが、残念ながら最近、日本の研究というのは世界の中で存在感が薄れていると言われております。実際、日本の水産学においても、過去には留学生が日本の水産学に憧れて日本に来たという時代がありましたが、今はどうもそういうふうには見えません。残念ながら、世界の研究、つまり論文の質を比べると、日本も頑張って論文を出しているのですが、論文がやや見劣りしてしまう状況がきております。

研究という意味では、あくまで私の意見ですが、過去においては非常に現場で課題解決の研究をしっかりしてきた、それが世界で認められて、日本の水産学は尊敬されていたというふうに思っております。そういう意味では、水産学というのは応用学問でございますので、今の水産の現場で課題解決に取り組んでおられる水産試験場の皆様方と、今、研究というのは様々な遺伝子やゲノム、それからビッグデータ、あるいはAIなどを含めて、研究を進めなくてはいけなくなってきており、一人の研究者だけではそういった課題解決に取り組むのが難しい状況になっています。そういった場で、研究者をつ

なぎ、研究を進めていくというのは、まさに水産学会のような学会組織の一つの役割だろうと考えております。そのように、全国水産試験場長会の皆様との連携を図るために、私も今回4回目ということでここに出席させていただいております。

そういったこともあり、今年度末には日本水産学会の春季大会が東京海洋大学で開催されますが、その際、全国水産試験場長会大会と水産学会理事会の合同シンポジウムをぜひ開催させていただこうということで、現在計画しております。詳しい話は後ほど星野副会長からあると思います。こうしたことを含めて、学生たちに今、地域の課題は何か、そしてそこに水産試験場はどうやって取り組み、またどうやって悩んでいるのか、次の若い世代がそこにどういったアプローチをし、自分たちに何ができるのかと、そういうことを考える機会をぜひどんどん作っていきたいと考えております。

日本水産学会では、実は学部生の大会参加については無料で参加できるようにしており、そうした形でぜひ若いうちに試験研究の大切さや面白さを知ってもらいたい、またそれを職業として考えたときに水産試験場というのが大きな地域を支える職場になるようになればいいかと考えております。

最近では、水産学会では若手の会が活発に活動しており、シンポジウムやナイトポスターセッションを行っています。その場に水産試験場から若手研究者の方にも来ていただき、仲間づくりが非常に盛んだと考えております。学会・理事会としても、若手の活性化は非常に重要だと認識しており、大いに支援したいと考えております。

また、本日も場長会の会長賞を含めて、こうした表彰があることで、研究者の方々、若手だけでなく多くの方々が活性化すると考えております。試験研究の活性化、それが学生たちにとっても魅力的な研究の場と言えるようになっていけばと考えております。

ぜひ、こうしたことも含めて、大学、試験研究機関、水産試験場、そして学生が働きたいと思うような場になっていくように、ぜひ連携を深めていきたいと考えております。

本日、この全国大会によって皆様方の連携が深まり、また水産学会も連携に加わらせていただき、ますます活発になって水産業界を支えていく、この場が盛会になることを祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

(3) 開催県

香川県農政水産部 部長 桑原 仁

皆さん、こんにちは。香川県農政水産部長の桑原でございます。令和7年度全国水産試験場長会全国大会開催にあたり、開催県を代表して一言ご挨拶申し上げます。

ここ香川県において令和7年度全国水産試験場長会全国大会を開催いたしましたところ、ご多忙の中、ご来賓の皆様をはじめ、全国各地の水産試験場長の皆様にご臨席賜り、心より歓迎申し上げます。

全国水産試験場長会におかれましては、平素より都道府県の水産試験研究機関の連携強化および情報交換の促進を図り、それらの成果を中央の水産行政や研究機関等に発信されるなど、地方水産試験研究の持続的な発展に多大なるご貢献をいただいておりますことに、厚く感謝申し上げます。

さて、本県は瀬戸内海の東部に位置し、多種多様な漁業が営まれております。中でも養殖業が盛んで、昭和3年に世界で初めてハマチの餌付けに成功し、ハマチ養殖の発祥地ということで、ちょうど3年後の令和10年に100周年を迎えることとなります。県魚のハマチと県木のオリーブをコラボレーションする研究に取り組み、平成20年には「オリーブハマチ」を生み出しました。近年はオリーブ水産物として「オリーブマダイ」や「オリーブサーモン」などへも展開しております。

近年、気候変動により水産業を取り巻く環境は厳しさを増しており、水産業を巡る諸課題を解決するには、基礎研究から漁業現場に対応する幅広い研究開発の取り組みが必要不可欠でございます。こうしたことから、全国水産試験場長会の役割が今後ますます重要になると考えております。

また、会の後には香川の食も楽しんでいただければと思います。本県は水産物以外にも「うどん県。それだけじゃない香川県」をキャッチコピーに、オリーブ牛、オリーブ夢豚、オリーブ茶など、オリーブを使ったさまざまな特産品がございます。また、骨付鳥や和三盆を使ったお菓子など、多様な美味しいものもございます。皆様にこれらを存分に堪能していただく機会がありますことを祈念申し上げ、簡単ではございますが、開催県のご挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。

3 報告

全国水産試験場長会会長(宮崎県水産試験場長) 大村 英二

まず、報告事項一つ目として、令和6年度の活動結果と令和7年度の活動計画について、資料1によりご報告いたします。

【令和6年度活動結果(資料1)】

令和6年度の主な活動実績ですが、幹事以外の会員の皆様には場長会の活動がイメージしにくいかもしれませんので、1年間の流れを時系列で説明させていただきます。

(1)の会議は、(2)の水産庁主催の第1回地域水産試験研究振興協議会の開催前に、三役会、海面部会・内水面部会、幹事会を開催したものです。(2)の第1回地域水産試験研究振興協議会では、前年度に提出した「令和6年度地域の抱える懸案事項について」の水産庁からの回答に対し、意見交換を行いました。(3)の関係機関訪問は、私が地域水産試験研究等促進奨励会を訪問したものです。(4)(5)は、全国大会の開催に向けて、表彰審査委員会、海面部会・内水面部会、幹事会を開催したものです。また、両部会および幹事会では「令和7年度地域の抱える懸案事項について」の課題を各ブロックから集約し、その取りまとめ方針について検討いたしました。(6)と(7)は、11月に長野県で開催した全国大会と、これに併せて開催した三役会です。全国大会では、優秀業績の表彰や、地域の水産業や試験研究についての情報交換、意見交換を行いました。(8)は、全国養鯉振興協議会主催の全国食用鯉品評会において、全国水産試験場長会から後援と表彰を行ったものです。福島県内水面水産試験場長に代理出席をお願いしました。

(9)は、全国内水面漁業振興大会に、内水面部会長が代表として参加いたしました。

(10)と(11)は、水産研究・教育機構主催の水産工学関係研究開発推進会議と開発調査推進会議に出席したものです。(12)は、2月に開催した第3回幹事会で、ここでは引き継ぎも兼ね、次年度の幹事にもご出席いただいております。(13)は、「令和7年度地

域の抱える懸案事項に関する提案・要望書」を水産庁及び水研機構へ提出したもので、内容については次の報告事項で説明いたします。(14)(15)では、水研機構主催の全国水産業関係研究開発推進会議および水産庁主催の地域水産試験研究振興協議会に、三役、ブロック幹事、次期就任幹事が出席し、意見交換を行いました。(16)は、全国青年・女性漁業者交流大会において場長会会長賞を授与したものです。

その他として、各種委員会への出席や、令和4年度から始まった「日本水産学会誌 水産研究のフロントから」への連載については、全国の会員の皆様に交代で寄稿いただいているところです。今後も足掛け8年の連載となりますので、引き続き原稿作成等よろしくお願いたします。

以上が、令和6年度の活動結果となります。

【令和7年度活動方針・活動状況（資料1）】

続いて、令和7年度の活動方針と計画、活動状況についてご報告いたします。今年度も全国水産試験場長会規約第5条の規定に基づき、記載のと通りの活動方針により取り組んでいるところでございます。

活動計画と活動状況を次のページに示しております。本日の全国大会まで、ほぼ例年どおりに活動しております。

(6)の三役会は本日の午前中に開催し、令和8年度地域の抱える懸案事項の内容と文面の調整を進めております。(7)が本日と明日の全国大会となります。

(8)～(13)は今後の会議等の予定で、例年どおりの計画となっております。

(14)は、全国水産学会と全国水産試験場長会で合同シンポジウムを行う予定で、後ほど星野企画担当副会長から説明があります。

以上が、令和7年度の活動方針と活動状況となります。

【国への提案・要望「地域の抱える懸案事項」等】

続いて、報告事項二つ目の国への提案・要望「地域の抱える懸案事項」等についてご報告いたします。令和7年度の提案・要望は、資料2のとおり令和7年2月に水産庁と水研機構に提出しており、会員の皆様には各ブロック幹事を通じて既に資料を配布しております。また、過去の提案・要望も含めて、全国水産試験場長会のホームページで公表しております。令和7年度の提案・要望として、制度設計課題で5課題、研究・技術開発課題で7課題を提出いたしました。

研究・技術開発課題については、令和7年2月に水研機構から、また制度設計課題については今年度6月に水産庁からご回答をいただき、これについても既に各ブロック幹事を通じて会員の皆様にお知らせしたところですので、ここでの詳細な説明は省略させていただきます。

今後の予定ですが、現在取りまとめ中の「令和8年度の提案・要望書」を来年2月上旬を目途に完成させ、水産庁、水研機構へ正式に提出いたします。その後、2月17日の水研機構主催の全国水産業関係研究開発推進会議および18日の水産庁主催の地域水産試験研究振興協議会において、提案・要望内容についての意見交換を行う予定です。これらの一連の会議には、今年度の三役・幹事とともに、オブザーバーとして次期幹事も同席していただくことになっておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

以上で報告を終わります。

令和6年度の活動結果
令和7年度の活動方針・活動計画

全国水産試験場長会

(令和7年5月29日幹事会承認事項をもとに作成)

令和6年度の活動結果について

- (1) 令和6年度第1回三役会、海面部会・内水面部会、幹事会の開催
(R6. 6月21, 26日) 三役、ブロック幹事出席
○令和6年度活動方針案及び活動計画案について
○地域水産試験研究振興協議会での協議事項について ほか
- (2) 令和6年度第1回地域水産試験研究振興協議会出席(水産庁主催)
(R6. 6月27日) 三役、ブロック幹事出席
○令和6年度地域の抱える懸案事項について ほか
- (3) 関係機関・団体等訪問(R6. 6月27日)
○訪問先: 地域水産試験研究等促進奨励会 会長対応
- (4) 令和6年度表彰審査委員会の開催(R6. 10月4日 WEB会議) 審査委員、
推薦ブロック幹事等出席
○優秀研究業績表彰候補の説明と審査
- (5) 第2回海面部会・内水面部会、幹事会の開催(R6. 10月17日) 三役、
ブロック幹事出席
○表彰審査委員会の結果について
○全国大会について
○令和7年度地域の抱える懸案事項について ほか
- (6) 令和6年度第2回三役会の開催(長野県)(R6. 11月7日)
○令和7年度地域の抱える懸案事項の検討 ほか
- (7) 令和6年度全国大会の開催(長野県)(R6. 11月7日~8日)
○活動報告
○情報交換
北海道の水産資源にみられる気候変動の影響
○話題提供
長野県における水産業と研究業務について
○会長賞表彰
①「温暖化に対応するコンブ養殖技術の改良と普及」
ーコンブ成熟誘導技術の開発ー
(地独) 北海道立総合研究機構稚内水産試験場 調査研究部
主査 前田 高志

- (地独) 北海道立総合研究機構函館水産試験場 調査研究部
研究主幹 秋野 秀樹
- ②「アカムツ種苗生産技術の開発に関する研究」
富山県農林水産総合技術センター水産研究所
主任研究員 福西 悠一
- ③「食味に優れた大型雌ウナギ生産技術の確立」
愛知県水産試験場漁業生産研究所
主任 稲葉 博之
- 現地意見交換会(犀川殖産漁業協同組合冬季ニジマス釣り場
長野県水産試験場) ほか
- (8) 全国養鯉振興協議会主催全国食用鯉品評会での場長会賞表彰
(R6. 11月11日) 福島県内水面水産試験場から代理出席
- (9) 第65回全国内水面漁業振興大会(宮城県) (R6. 11月14日)
内水面部会長(副会長) 対応
- (10) 令和6年度水産工学関係研究開発推進会議出席
(水産研究・教育機構主催)(R6. 11月22日)
会長、参加希望会員対応
- (11) 令和6年度開発調査推進会議出席(水産研究・教育機構主催)
(R7. 2月6日) 会長、参加希望会員対応
- (12) 令和6年度第3回幹事会の開催(R7. 2月17日)
三役、ブロック幹事、次期就任幹事
- (13) 令和7年度地域の抱える懸案事項に関する提案・要望書提出
(R7. 2月) 三役対応
○水産庁、国立研究開発法人水産研究・教育機構へ提出
- (14) 令和6年度全国水産業関係研究開発推進会議出席
(水産研究・教育機構主催)(R7. 2月18日)
三役、ブロック幹事、次期新規就任幹事
- (15) 令和6年度第2回地域水産試験研究振興協議会出席(水産庁主催)
(R7. 2月19日) 三役、ブロック幹事、次期新規就任幹事
- (16) 全国青年・女性漁業者交流大会での場長会会長賞の授与
(R7. 3月4日~5日) 会長対応

※その他水産庁、水産研究・教育機構等からの各種協力依頼に随時対応

- 水産研究・教育機構機関評価委員会（水産研究・教育機構主催）
- 水産増殖懇話会（日本水産学会主催、特別幹事が担当）
- 水産研究・技術開発戦略検討委員会（水産庁増殖推進部主催）
- 日本水産学会誌「水産研究のフロントから」寄稿連載（今年度分）
 - 90(3) 福岡県水産海洋技術センター
 - 90(4) 島根県水産技術センター
 - 90(5) 石川県水産総合センター
 - 90(6) 栃木県水産試験場
 - 91(1) 滋賀県水産試験場
 - 91(2) 岩手県水産技術センター

令和7年度の活動方針・活動計画について

【令和7年度の活動方針】

全国水産試験場長会では、全国水産試験場長会規約第5条の規定に基づき、令和7年度に下記の活動に取り組むものとする。

記

- 1 会員間の緊密な連携と情報交換の促進
- 2 関係する他機関等との情報交換、意見交換の促進
- 3 制度設計課題、技術課題のとりまとめ及び関係機関への要望活動など
- 4 地域水産試験研究振興協議会、全国水産業関係研究開発推進会議への参加及び意見提起など
- 5 新しい資源管理に対応するための関係団体等との協議・要望活動など
- 6 全国大会の開催（PR活動含む）
- 7 優秀研究業績の表彰に係る審査、決定、公表など
- 8 会や会員の活動内容、研究成果などの情報発信及びPRなど
- 9 上記の目的を達成するための、幹事会、部会、三役会の開催

(参考) 全国水産試験場長会規約抜粋

(事業)

第5条 本会の目的達成のため、次の事業を行う。

- (1) 会員間及び本会に関係する他機関との情報交換
- (2) 中央の関係機関への要望及び提言
- (3) 全国大会の開催
- (4) 優秀研究業績の表彰
- (5) 会報の発信
- (6) その他第3条の目的を達成するために必要な事業

【令和7年度の活動計画と活動状況】

- (1) 令和7年度第1回三役会、海面部会・内水面部会、幹事会の開催
(R7. 5月26, 29日) 三役、ブロック幹事出席
○令和7年度活動方針案及び活動計画案について
○地域水産試験研究振興協議会での協議事項について ほか
- (2) 令和7年度第1回地域水産試験研究振興協議会出席(水産庁主催)
(R7. 5月30日) 三役、ブロック幹事出席
○令和7年度地域の抱える懸案事項について ほか
- (3) 関係機関・団体等訪問(R7. 5月30日) 会長対応
○訪問先: 地域水産試験研究等促進奨励会
- (4) 第66回全国内水面漁業振興大会(石川県) (R7. 10月7日)
内水面部会長(副会長) 対応
- (5) 令和7年度表彰審査委員会、第2回海面部会・内水面部会、幹事会の開催
(R7. 10月9, 10日) 三役、ブロック幹事出席
○表彰審査委員会の結果について
○全国大会について
○令和8年度地域の抱える懸案事項について ほか
- (6) 令和7年度第2回三役会の開催(香川県) (R7. 11月18日)
○令和8年度地域の抱える懸案事項の検討 ほか
- (7) 令和7年度全国大会の開催(香川県) (R7. 11月18, 19日)
○活動報告
○話題提供
○会長賞表彰
○現地意見交換会 ほか
- (8) 全国養鯉振興協議会主催全国食用鯉品評会での場長会賞表彰
(R7. 11月19日) 福島県内水面水産試験場から代理出席
- (9) 令和7年度第3回幹事会の開催(R8. 2月16日予定)
三役、ブロック幹事、次期就任幹事

- (10) 令和7年度地域の抱える懸案事項に関する提案・要望書提出
(R8. 2月) 三役対応
○水産庁、国立研究開発法人水産研究・教育機構へ提出
- (11) 令和7年度全国水産業関係研究開発推進会議出席
(水産研究・教育機構主催) (R8. 2月17日予定)
三役、ブロック幹事、次期新規就任幹事
- (12) 令和7年度第2回地域水産試験研究振興協議会出席 (水産庁主催)
(R8. 2月18日予定) 三役、ブロック幹事、次期新規就任幹事
- (13) 全国青年・女性漁業者交流大会での場長会会長賞の授与
(R8. 3月5, 6日予定)
- (14) 全国水産学会・全国水産試験場長会、合同シンポジウム
(R8. 3月26日予定)

※その他水産庁、水産研究・教育機構等からの各種協力依頼に随時対応

- 水産研究・教育機構機関評価委員会 (水産研究・教育機構主催)
- 水産工学関係研究開発推進会議 (水産研究・教育機構主催)
- 開発調査推進会議 (水産研究・教育機構主催)
- 水産増殖懇話会 (日本水産学会主催、特別幹事が担当)
- 日本水産学会誌「水産研究のフロントから」寄稿連載 (今年度分)

- 91(3) 佐賀県玄海水産振興センター
- 91(4) 福井県水産試験場
- 91(5) 岡山県農林水産総合センター 水産研究所
- 91(6) 群馬県水産試験場
- 92(1) 京都府農林水産技術センター 海洋センター
- 92(2) 宮城県水産技術総合センター

水産庁長官 森 健 様

国立研究開発法人水産研究・教育機構
理事長 中山 一郎 様

令和7年度
地域の抱える懸案事項に関する
提案・要望書

令和7年2月
全国水産試験場長会

地域における水産試験研究の推進につきまして、日頃より格別の御指導、御支援を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、現在、我が国の水産業は、漁業法改正に伴う新たな資源管理システムへの対応、地球温暖化などの気候変動による海洋・内水面水域の環境変化、これまでとは異なる赤潮の大規模発生、疾病被害の拡大や新規疾病への対応、東日本大震災からの復興と原子力発電所の事故に伴う水産物の安全対策や輸出・風評対策に加え、ウクライナの情勢や円安等の影響による物価の高騰など、様々な問題に直面しております。

全国水産試験場長会では、会員が密接に連携し、これら諸問題に対し調査・研究に努めているところですが、国の行政並びに研究機関の御理解と御協力がなければ解決が困難な課題もあることから、会員総意のもとに「令和7年度地域の抱える懸案事項に関する提案・要望書」を取りまとめました。

本提案・要望書の内容につきましては、我が国の水産業の持続的な発展と成長産業化に不可欠なものであります。水産庁並びに国立研究開発法人水産研究・教育機構におかれましては、令和7年度以降の政府施策の決定や予算編成などにおいて、次項の提案・要望項目について特段の御高配を賜りますようお願い申し上げます。

令和7年2月

全国水産試験場長会

全国水産試験場長会からの提案要望は、毎年、水産庁と水産研究・教育機構に提出後に、全国水産試験場長会ホームページでも「提言」として公表しています。

「提言」

<http://www.fishexp.hro.or.jp/cont/jochokai/proposition/n0e70g00000034a.html>

「令和7年度地域の抱える懸案事項に関する提案・要望書」では、以下の大項目に含まれる個々の課題について提案・要望しました。

【制度設計課題】

- 試験研究等予算の確保
- 国・地方が一体となって進める資源管理体制の強化
- 養殖業の成長産業化のための魚介類の疾病対策の推進
- 内水面水産資源の回復に向けた取組の推進
- 東日本大震災及び原発事故に起因する課題に対応した研究の推進

【研究・技術開発課題】

- 資源管理に関する調査研究の高度化
- 気候変動等による漁場環境の変化への対応
- 養殖業の所得維持・向上のために解決すべき課題
- 有害有毒プランクトンの広域モニタリング体制構築、簡易検査手法および発生予測手法の開発
- 魚病防疫に関する研究・開発
- 水産資源への加害生物対策の強化
- 東日本大震災及び原発事故に起因する課題に対応した研究及び調査の推進

**令和7年度全国水産試験場長会
全国大会（情報交換）**

秋田県における内水面漁業の課題

令和7年11月18日 香川県高松市

内水面部会 東北・北海道ブロック
中林 信康（秋田県水産振興センター）

**秋田県水産振興センター
・内水面試験池**

水産振興センター（男鹿市）湖沼・外来魚対策

内水面試験池（北秋田市）サクラマス・アユ放流・養殖技術開発等

地図出典：国土地理院 (<https://maps.gsi.go.jp/vector/>)

R4漁業生産量

- 河川・湖沼漁業 **217 t**
漁協数：23
- 養殖業 **35 t**

地図出典：国土地理院 (<https://maps.gsi.go.jp/vector/>)

R 4 漁業生産量の構成

河川・湖沼漁業

217 トン

養殖業

35 トン

河川・湖沼漁業	養殖業
ワカサギ (八郎潟)	アユ
ワカサギ (十和田湖)	その他マス類
ヒメマス (十和田湖)	ニジマス
アユ	
シラウオ	
コイ	
フナ	
サクラマス	
シジミ	
その他	
	エビ類

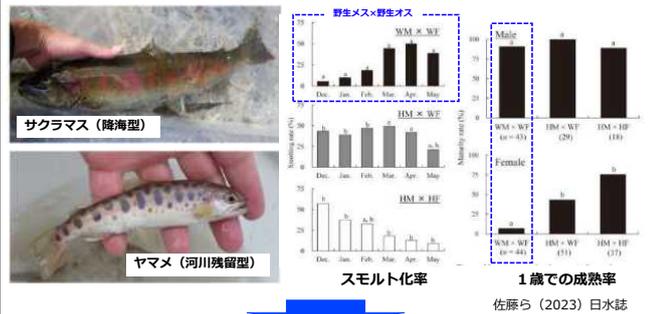
河川・湖沼生産量の推移 (H10～R4)

● 組合員：11,259人 → ▲54% → 5,168人へ
● 生産量：799トン → ▲73% → 217トンへ
ワカサギの割合：43% → 93% (=河川漁業減)

養殖生産量の推移 (H10～R4)

● 経営体：84経営体 → ▲74% → 22 (R5センサス) へ
● 生産量：367トン → ▲90% → 35トンへ
内訳：ニジマス9トン、その他マス13トン、アユ13トン
コイの割合：H10年は42% → R4統計上－

効果的な種苗生産・放流



・県外産ヤマメとの交雑による遺伝的影響が懸念
→親魚の安定的確保、種苗生産の担い手不足・施設老朽化に課題

気候変動・環境変化への対応①

・温暖化による水温上昇は、生息適水温が20℃以下のサクラマスに対し、下流側から越夏・産卵適地の縮小をもたらす可能性がある。



・集中豪雨に対し、アユは、流路幅が狭く、流速が速く、水深が浅く、濁りの消失日数が短い小支流で生息尾数が多く、肥満度も高い。

	小猿部川	阿仁川
生息尾数(尾/m)	1.57 >	0.04
流路幅(m)	10.2 ± 2.3 <	43.8 ± 1.6
水深(cm)	40.9 ± 11.1 <	44.8 ± 13.3
浮き石率(%)	86.7 >	26.7
濁りの消失日数(日)	5 <	10
体長(cm)	14.1 ± 1.6 <	16.2 ± 1.6
肥満度	14.2 ± 1.3 >	13.6 ± 0.9



気候変動・環境変化への対応②

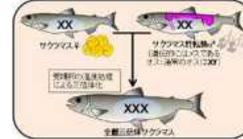
対象種の生活史を通じた生息域の確保
= 連続性の確保 → 魚道機能の維持、汲み上げ放流等



簡易魚道などの方策を開発・実施
→ 労力と経費 → 高齢化・人材不足等 → 普及に課題

養殖業の振興

■ 秋田の大型マス養殖種作出事業



・倍化技術の取得や給餌頻度試験等を経て、現在7事業者で飼育試験中



■ 養殖・種苗生産業者



高付加価値魚の低コスト飼育技術、疾病対策、放流用種苗の安定生産に課題

加害生物による漁業被害

カワウ

R6年：全県で約1,800羽



エアライフル等駆除実績
R4・R5・R6 = 147・63・80

ブラウントラウト



ウライによる駆除実績
R5・R6 = 27・14 (1河川)

ミスワクチヒルゲイツウ



横手川本支流に広く分布
下流域への拡大懸念

効果的・効率的・省力的な対策技術の導入と迅速な普及が必要

ご清聴ありがとうございました。



その他の課題

- ・釣り人口の減少
- ・内水面漁協の維持
- ・生産コスト、放流コストの上昇・・・

令和7年11月18日（火）
令和7年度全国水産試験場長会全国大会

香川県の水産業と試験研究について

小川健太（香川県水産試験場）

1

本日の内容

- ・香川県の水産業
- ・香川県水産試験場の試験研究（事例紹介）

2

本日の内容

- ・香川県の水産業
- ・香川県水産試験場の試験研究（事例紹介）

3

香川県の概要

人口	約90万人（全国38位）
面積	1,876km ² （全国最小）
海域	1,923km²（全国16位：海岸線）
特産	うどん、 オリーブ
観光	金毘羅山、瀬戸内国際芸術祭




オリーブ

4

香川県水産試験場の概要

設立	1900年（明治33年）
場所	香川県高松市屋島東町75-5（1970年～）
職員数	28名（うち、研究員14名）
調査船	やくり（19t）
部門	① 環境資源研究課 ② 増養殖研究課 ③ 赤潮研究所 ④ 栽培漁業センター（魚病）



水産試験場の施設

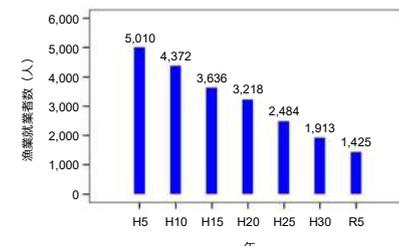


調査船「やくり」

現在、建て替えに向けて準備中

5

香川県の漁業就業者数

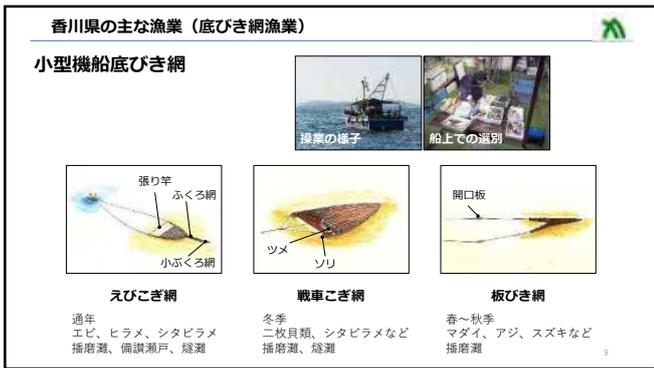


年	漁業就業者数（人）
H5	5,010
H10	4,372
H15	3,636
H20	3,218
H25	2,484
H30	1,913
R5	1,425

H5-R5漁業センサス（改）

R5の漁業就業者数は、H5（30年前）と比較して**71%減少**
R5の年齢別では**55歳以上が63%**を占めている（高齢化）

6



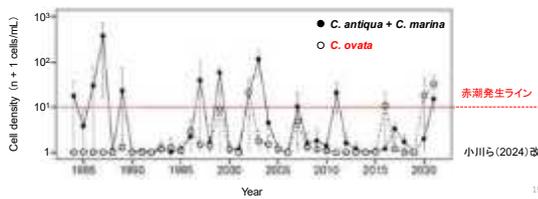
- ・香川県の水産業
- ・香川県水産試験場の試験研究（事例紹介）

有害ラフィド藻 *Chattonella ovata* のブリに対する毒性と致死細胞密度

：香川県における *Chattonella* 属の警戒密度
（養殖ハマチへの餌止めの基準密度）の見直しに関する提案

序論 香川県の赤潮被害

- ・1970～1980年代に赤潮被害が頻発（主な原因種は *C. antiqua* と *C. marina*）
- ・2000年代以降、環境改善により赤潮被害は減少（瀬戸内法の効果）
- ・近年、*C. antiqua* と *C. marina* の赤潮頻度は減少傾向、*C. ovata* は増加傾向



序論 香川県の赤潮対策

- ・1980年代に赤潮監視体制を整備（県と漁業者が共同で実施）
- ・有害プランクトンが一定の細胞密度（警戒密度）を超えると、餌止めを実施

Chattonella属 → 3種合計で10 cells/mL



Chattonella antiqua *Chattonella marina* *Chattonella ovata*

序論 *Chattonella* 属の警戒密度が設定されるまでの経緯

- ・1980年代（赤潮対策開始当初）
C. antiqua + *C. marina*（2種合計）→ 10 cells/mL
- ・2004年
香川県で初めて *C. ovata* による赤潮被害が発生
- ・2005年～
C. antiqua + *C. marina* + *C. ovata*（3種合計）→ **10 cells/mL**
* *C. ovata* の毒性に関する知見が少ないための暫定的措置

序論 本研究の目的

- ・近年、*C. ovata* を優占種とした餌止めの事例が頻繁に発生（高密度化なし）
- ・餌止めは有効な赤潮対策と認識（漁業者の経験則）
- ・しかし、ブリの成長低下による経済的損失が発生（最小限の期間に抑えたい）

漁業者は、*C. ovata* の毒性を考慮した警戒密度の改訂を要望

***C. ovata* の毒性の強さを調べ、合理的な赤潮対策を提案**

まとめ



- ・ *C. ovata*のブリに対する毒性は*C. marina*より弱い
- ・ *C. ovata*では毒性の強さとスーパーオキシドが比例しない (*C. marina*と異なる)
- ・ *C. ovata*によるブリの斃死要因は鰹への作用 (*C. marina*と同じ)
- ・ 現場海域での*C. ovata*によるブリの致死細胞密度は数百cells/mL

25

警戒密度の見直し (提案)



県の赤潮対策は、安全側に立った基準で運用する必要がある (原則)
→ 餌止めによる経済的損失の軽減を併せて考えると、

【現在】 *C. antiqua* + *C. marina* + *C. ovata* (3種合計) → 10 cells/mL

【提案】 *C. antiqua* + *C. marina* (2種合計) → 10 cells/mL
C. ovata (1種のみ) → 10 cells/mL



令和8年度より新基準で運用予定 (関係機関と調整中)

25

謝辞

今後も、漁業者の利益につながる試験研究を行いたい。
(行政施策の科学的根拠)

本発表を行うにあたり、ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

ご清聴ありがとうございました。

27

6 優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰式

(1) 審査委員長経過報告・講評

全国水産試験場長会 副会長

(北海道立総合研究機構 水産研究本部長) 星野 昇

審査委員長の星野より、令和7年度の審査委員会の経過及び結果についてご報告いたします。10月9日に東京都島しょ農林水産総合センターにおいて審査委員会を開催し、3つのブロックより推薦のあった各表彰候補について、リモートにより各研究担当者から推薦業績の説明と質疑応答を行い、審査を実施しました。

審査は、全国のブロック幹事から選出された5名の審査委員と審査委員長により、規定に基づき「地域の水産業の振興に貢献するか」「試験研究の成果が今後の水産試験研究の発展に寄与すると認められるかどうか」、主にこの2点を評価の視点として審査しました。その結果、いずれも全国水産試験場長会会長表彰を受けるにふさわしい業績であると判断されました。

1つ目は、海面部会 九州・山口ブロックから推薦されました、宮崎県水産試験場の上林大介さんによる「環境DNAを用いたかつお一本釣漁場探索手法の開発と実践」です。

これまで知見の非常に少ない外洋域での環境DNA分析により、ビンナガの漁場探索技術を開発されました。研究を進める中で、海域での流れを模した河川による検出距離調査や、浮き魚礁周辺での海洋環境要因の影響調査を実施し、その有効性を確認するなど、様々な工夫を重ねて実用性を高められており、研究成果が他の漁業・魚種へ展開され、外洋で操業する漁船漁業の支援方法として広がっていくことが期待される優秀な業績と認められました。

2つ目は、海面部会 東北ブロックから推薦されました、宮城県水産技術総合センター 気仙沼水産試験場の田邊徹さんによる「マボヤの貝毒対策に関する研究」です。

出荷時期が貝毒の発生時期と重なることが多いマボヤについて、肝臓を除去する処理加工により貝毒の減毒・無毒化ができる可能性を示されました。毒性の器官偏在や季節性、二枚貝類との比較など丁寧な分析を進め、成果は複数の論文として公表されており、学術知見の蓄積にも大いに貢献されました。マボヤ生産者や加工業者が抱える問題の解決により、今後の地域水産業の振興につながることを期待される優秀な業績と認められました。

3つ目は、内水面部会 東北・北海道ブロックから推薦されました、北海道立総合研究機構 網走水産試験場の渡辺智治さんによる「網走湖の塩分環境保全とヤマトシジミ資源の回復」です。

網走湖のヤマトシジミの資源減少要因が、河川に設置された可動堰による湖内への海水流入量減少に伴う淡水化であることを突き止め、長期にわたる野外モニタリングデータと実験により塩分による成長・生残への影響を明らかにされました。関係機関と連携

して可動堰の再稼働を実現させ、湖内の塩分環境の改善を図りヤマトシジミの資源回復を実現させたことにより、今後、環境保全に配慮した地域水産業の振興につながることを期待される優秀な業績と認められました。

いずれも素晴らしい研究業績であり、地域のため奮闘し大きな貢献をされた受賞者の皆様方に改めて敬意を表します。本日は誠におめでとうございます。

令和7年度全国水産試験場長会会長賞 表彰審査委員会 審査結果報告書

(令和7年10月10日付)

全国水産試験場長会
会長 大村 英二 様

全国水産試験場長会
優秀研究業績表彰審査委員会
審査委員長 星野 昇

令和7年度全国水産試験場長会会長賞表彰候補に推薦された3業績について、下記のとおり審査委員会を開催したので審査結果を報告します。

記

開催日時・場所：令和7年10月9日（火）14:00～16:00 東京都島しょ農林水産総合センター

開催方法：リモート併用による各研究担当者からの推薦業績の説明と審査

出席者：

審査委員

委員長 星野 昇（北海道ブロック：北海道立総合研究機構水産研究本部 本部長）
委員 樋口 正仁（北部日本海ブロック：新潟県水産海洋研究所 所長）
後藤 功一（東海・北陸ブロック：岐阜県水産研究所 所長）
三木 勝洋（瀬戸内海ブロック：香川県水産試験場 場長）
石原 幸雄（西部日本海ブロック：鳥取県水産試験場 場長）
藍 憲一郎（関東・甲信越ブロック：千葉県水産総合研究センター内水面水産研究所 所長）

推薦ブロック幹事

海面 山下 武志（九州・山口ブロック：熊本県水産研究センター 所長）
海面 高橋 正和（東北ブロック：茨城県水産試験場 場長）
内水面 中林 信康（東北・北海道ブロック：秋田県水産振興センター 所長）

オブザーバー

会長 大村 英二（宮崎県水産試験場 場長）
事務局 神柱 武志（同 経営流通部長）
特別幹事 中野 卓（東京都島しょ農林水産総合センター 所長）
前田 洋志（同 振興企画室長）
次期会長県 太田 克彦（岩手県水産技術センター 所長）
藤村 崇（同 企画指導部長）
幹事県等 篠崎 貴史（熊本県水産研究センター 主幹兼企画情報室長）
斎藤 和敬（秋田県水産振興センター 総務企画室長）
保坂 芽衣（同 主査）
織田 純生（高知県内水面漁業センター 所長）
伊與田 慎右（WEB参加）（高知県内水面漁業センター 所長）

推薦業績説明者

上林 大介（宮崎県水産試験場 主任研究員）
田邊 徹（宮城県水産技術総合センター気仙沼水産試験場 主任研究員）
渡辺 智治（北海道立総合研究機構 網走水産試験場 主査）

審査結果：

海面部会2ブロックと内水面部会1ブロックから推薦のあった以下の3業績について、推薦理由を各推薦ブロック幹事から、推薦業績を各研究担当者からそれぞれ説明を受けて審査した結果、いずれも令和7年度全国水産試験場長会会長賞表彰を受けるにふさわしい業績と判断されました。

(1) 海面部会 九州・山口ブロック

「環境DNAを用いたかつお一本釣漁場探索手法の開発と実践」

宮崎県水産試験場 経営流通部

主任研究員・上林 大介

選考理由

これまで知見の非常に少ない外洋域での環境DNA分析により、ピンナガの漁場探索技術を開発した。海域での流れを模した河川による検出距離調査や、浮き魚礁周辺での海洋環境要因の影響調査を実施して、その有効性を確認するなど様々な工夫を重ね実用性を高めていったことは、今後、成果が他の漁業・魚種へ展開され、外洋で操業する漁船漁業の支援方法として広がっていくことが期待される。

(2) 海面部会 東北ブロック

「マボヤの貝毒対策に関する研究」

宮城県水産技術総合センター 気仙沼水産試験場

主任研究員 田邊 徹

選考理由

出荷時期が貝毒の発生時期と重なることが多いマボヤについて、肝臓を除去する処理加工により貝毒の減毒・無毒化ができる可能性を示した。毒性の器官偏在や季節性、二枚貝類との比較など丁寧な分析を進め、成果は複数の論文として公表されており学術知見の蓄積にも大いに貢献された。マボヤ生産者や加工業者が抱える問題の解決により今後の地域水産業の振興につながることを期待される。

(3) 内水面部会 東北・北海道ブロック

「網走湖の塩分環境保全とヤマトシジミ資源の回復」

網走水産試験場 調査研究部

主査 渡辺智治

選考理由

網走湖のヤマトシジミの資源減少要因が、河川に設置された可動堰による湖内への海水流入量減少に伴う淡水化であることをつきとめ、長期にわたる野外モニタリングデータと実験により塩分による成長・生残への影響を明らかにした。関係機関と連携して可動堰の再稼働を実現させ、湖内の塩分環境の改善を図りヤマトシジミの資源回復を実現させたことにより、今後、環境保全に配慮した地域水産業の振興につながることを期待される。

(2) 副賞贈呈・挨拶

地域水産試験研究等促進奨励会

(一般社団法人 全国水産技術協会) 和田 時夫

皆さん、こんにちは。全国水産技術協会の和田でございます。地域水産試験研究等促進奨励会を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

まず、本日、栄えある全国水産試験場長会会長賞を受賞されます三つの課題の関係者の皆様、誠におめでとうございます。お手元の資料に、この奨励会の趣旨と現在の構成団体 13 が記載されておりますが、リストアップもしております。これらの団体はどれも、実際に仕事をさせていただく際に、地域の試験研究機関の成果、それから試験研究機関の皆様との連携によって仕事を進めております。そういったことから、少しでも研究のお手伝いができないかということで、令和 2 年度からこの奨励会を構成し、毎年度場長会の会長賞に副賞として贈呈をさせていただいております。

申し上げるまでもなく、水産業というのは地域の資源、自然環境、また社会経済に密着した産業でございます。地域ごとでの試験研究というのが、何ものにも増して欠かせないと考えております。奨励会としても、これからも本当に心ばかりではございますが、側面からの支援を続けてまいりたいと思っております。ぜひ、全国水産試験場長会との関係の皆様におかれましても、構成団体とこれからもご厚誼を賜り、また仕事にあたりましては、ぜひ連携のご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

本日は本当におめでとうございます。

全国水産試験場長会の皆様へ

地域水産業等を対象に事業を展開している全国的な水産関係団体は、水産試験場等の試験研究成果等を基礎とし、これら機関と連携して業務を進めてきました。こうしたなか、気候変動や国際情勢の変化を背景に国際的な水産物の需給関係が厳しさを増す一方、国内においては、水産業におけるスマート化や DX 化の推進や、ブルーカーボン等も活用したカーボンニュートラルの実現、さらには水産以外の分野とも連携した海業の展開が期待されており、両者の緊密な連携協力が一層重要となっております。

このため、令和 2 年度に全国的な水産関係団体により「地域水産試験研究等促進奨励会」を結成し、それまで一般社団法人全国水産技術協会が行ってきた「優秀研究業績表彰」に対する事業を継承発展させ実施してまいりました。

今年度も下表に示す水産関係団体により、優秀研究業績表彰に対する副賞贈呈の事業を実施することといたしました(参考:優秀研究業績表彰副賞=図書券 10 万円/件×3 件)。

場長会の皆様方には、このような趣旨及び経緯をご理解賜り、引き続き一層の連携協力を頂きますようよろしくお願い申し上げます。

令和 7 年 11 月 18 日

地域水産試験研究等促進奨励会

地域水産試験研究等促進奨励会の構成団体(五十音順)

団体名	ホームページ URL
公益財団法人 海と渚環境美化・油濁対策機構	https://www.umitonagisa.or.jp/
公益財団法人 海外漁業協力財団	https://www.ofcf.or.jp/
一般社団法人 水産土木建設技術センター	https://www.fidec.or.jp/
一般社団法人 漁業情報サービスセンター	https://www.jafic.or.jp
全国漁業協同組合連合会	https://www.zengyoren.or.jp/
一般社団法人 全国水産技術協会	https://www.jfsta.or.jp
一般財団法人 漁港漁場漁村総合研究所	https://www.jifc.or.jp/
全国内水面漁業協同組合連合会	https://www.naisuimen.or.jp
公益社団法人 全国豊かな海づくり推進協会	https://www.yutakanaumi.jp/
一般社団法人 大日本水産会	https://www.suisankai.or.jp
一般財団法人 東京水産振興会	https://www.suisan-shinkou.or.jp/
公益社団法人 日本水産資源保護協会	https://www.fish-jfrca.jp/
一般社団法人 マリノフォーラム21	https://www.mf21.or.jp
事務局	(一社)全国水産技術協会

会長賞受賞者記念講演

環境DNAを用いたかつお一本釣漁場探索手法の開発と実践

宮崎県水産試験場
主任研究員 上林大介

【背景と目的】

宮崎県において近海かつお一本釣漁業は、水揚げ量が30年間連続日本一になり、海面漁業においてマグロ類、カツオ類の生産額が約7割を占めるなど重要な漁業である。同漁業は主にカツオとビンナガを漁獲の対象としており、これらの来遊状況を把握することが効率的な漁獲に繋がることから、これまで水温や潮の流れなどの情報を元に来遊予測技術の開発を行ってきたが、来遊期間の短いビンナガの初期来遊を捉えることが困難で、課題であった。そこで、近年水産分野でも技術が導入されつつある、環境DNAを用いたかつお一本釣りの漁場探索技術の開発を行った。

【内容】

外洋域における環境DNAに関する知見が極めて少ないことから、河川環境での検出距離調査や、浮き魚礁周辺海域での環境要因影響調査を実施し、外洋域での環境DNAを用いた調査の有効性を確認した。さらに、環境DNAの定量は、供給源からの距離とバイオマスの影響を大きく受け、環境DNAのみで漁場予測を行うことは困難であることから、特定水深帯の水温構造や他漁業種類の漁獲データの分析結果を組み合わせ利用した調査法を構築した。

【成果と波及効果】

2025年5月の調査船調査においてビンナガの環境DNAを検出し、初期来遊を捉えることに成功し、リアルタイムで業者船に情報提供を行った。ビンナガの初期来遊を捉えることで、かつお一本釣船のスムーズな漁場転換が実現し、効率的な操業を行うことで、漁業経営の安定化が図られる。

環境DNAを用いた かつお一本釣漁場探索手法の開発と実践



宮崎県水産試験場
経営流通部 上林 大介

【背景と目的】 宮崎県のかつお一本釣漁業

5～6月短期間
対象のビンナガ



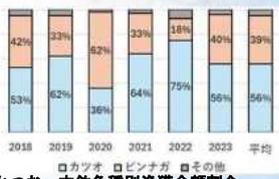
周年対象の
カツオ

2023年度かつお一本釣階層別漁獲量(単位:100t)

順位	かつお一本釣漁業			
	遠洋	近海	沿岸	計
1	静岡 101	宮崎 181	高知 133	宮崎 232
2	三重 83	高知 30	三重 16	高知 197
3	宮崎 45	×	和歌山 8	101
4	高知 34	×	鹿児島 6	99
5	×	×	×	31
全国	34	34	13	13

30年連続
日本一！

17年連続
日本一！



かつお一本釣魚種別漁獲金額割合

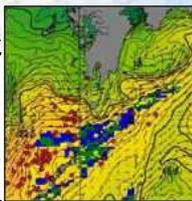
- 宮崎県は全国一のかつお一本釣漁業を擁する
- 周年のカツオと、短期間のビンナガを組み合わせる操業

【背景と目的】 かつお・まぐろ漁場予測への環境DNA技術利用検討の開始

漁業調査船「みやざき丸」

近海かつお一本釣の
漁場調査を実施

- ・海面水温
- ・QRY(無線漁況情報)
- ・過去の漁獲データ
- ・漁場予測システム
などを予測に利用



環境DNAの調査技術を導入

ウェット研究室



ステリベクスフィルターによる
海水のろ過作業

ドライ研究室



カツオ・ビンナガ等を
対象に定量PCRが可能

試薬等調整作業



モバイル型
リアルタイムPCR



【業績関連研究課題と実施年度】

実施年度	研究課題	関連内容
2016年 ～ 2020年	かつお・まぐろ 漁業の収益向上 に関する研究	2017: 環境DNA調査開始 2017: 外洋域でカツオ・ビンナガ等の環境DNA 検出に成功 2018: ビンナガ環境DNAの定量分析と 漁獲情報との比較検討を開始 2020: 餌料生物との比較検討を実施
2021年 ～ 2025年	かつお・まぐろ 漁業の収益向上 に関する研究 II	2022: 6代みやざき丸が進水 2023: みやざき丸船上で環境DNA分析を開始 : 環境DNA動態に関する基礎研究を実施 : 水温構造でのビンナガ行動予測手法開発 2024: 環境DNAでカツオ回遊の捕捉に成功 : パッシブサンプリング手法の検討を開始 2025: 環境DNAによる漁場調査の実践開始 : 環境DNAでビンナガ来遊捕捉に成功し、 関係船へ情報を提供

環境DNAで漁場探索を行うための課題と検討 その1

外洋域の環境DNAに関する知見が極めて少ない

- 外洋域での環境DNA検出距離が不明
- 環境要因(水深、海流等)の影響が不明
→検出した環境DNAの評価が困難
→調査計画の策定が困難

基礎データ
が足りない...

外洋域を対象とした環境DNAの基礎研究が必要

- ①検出距離の測定(クロマグロをサンプルとした定量PCR)
河川でのシミュレーション試験の実施
- ②水深、海流等の影響推定(カツオを対象とした定量PCR)
魚群を捕捉し、生じた環境DNAの水深・海流等に対する動態を調査

基礎研究 その1 -河川環境での検出距離調査-

- 黒潮流域を河川で模し試験を設定
- 試験環境に存在しないDNAサンプルを用いて検出距離を計測

五ヶ瀬川に設置した採水地点



サンプルDNAの検出結果		
採水地点	流下距離	DNAコピー数 / 1ℓ
G-0	0m	1,067,015
G-1	100m	514
G-2	500m	-
G-3	1,000m	103
G-4	3,000m	71
G-5	7,000m	91
G-6	10,000m	-

DNA供給源の
クロマグロサンプル

当初は
短区間で
大きく減少

その後は
安定的に
長距離到達

基礎研究 その2 -浮魚礁周辺海域での環境要因影響調査-

環境DNA供給魚群を捕捉し、潮流・水深等の環境要因の影響を確認

うみさち6・7号と採水実施箇所

※図中の矢印は流向・流速を示す

ソナーで捕捉 (A-1・B-1)

採水地点	対象魚群及び距離	採水水深	DNA コピー数 / 水3ℓ
A-1	A群	0m	47,564
	直上	50m	514
	100m	326	
A-2	A群より	0m	332
	50m	0	
	1マイル	100m	128
A-3	A群より	0m	291
	50m	0	
	2マイル	100m	260
B-1	B群	0m	835
	直上	50m	0
	100m	0	
B-2	B群より	0m	356
	50m	0	
	1マイル	100m	0
B-3	B群より	0m	53
	50m	317	
	2マイル	100m	0

2マイル下流まで検出

水深ごとの差が大きい

基礎研究の結果では
外洋域での環境DNA調査に可能性持てる結果

環境DNAで漁場探索を行うための課題と検討 その2

○漁場予測=どこ(距離)? ×どれだけ(バイオマス)?
○DNA量は『距離』と『バイオマス』に大きく影響

環境DNAのみでの漁場予測は困難

○対象の絞り込み

- ・ビンナガ漁開始時に漁場海域が大きく転換
- ・漁場は短期集中的に形成するため、タイミングを把握が重要

ビンナガの漁場への来遊把握を調査のターゲット

○他予測手法の併用

- ・環境DNAに他データ活用複合して予測する手法を検討する
- 水温構造や他漁業種類の漁獲データを活用する

環境DNAを用いたビンナガ来遊把握調査のイメージ

○環境DNAでの漁場予測は困難→魚群存在の捕捉は可能
○ビンナガ来遊を環境DNAで捉え、かつお一本釣漁場が転換するタイミングを予測する

環境DNA捕捉

漁場形成が予測される海域

予測回遊ルート

みやさき丸

情報提供

【オレンジ矢印】
水温・漁獲データ等からビンナガ回遊ルートを予測

【×印】
回遊ルート上に調査ライン設定

【青矢印】
ライン上をビンナガが通過した際、環境DNAで捕捉する(黄色○印)

○環境DNA検出時は、その後の漁場予測海域を関係船に情報提供
○スムーズな漁場転換を実現し、効率的な操業を実現

環境DNAで来遊を捕捉する(カツオでの事例)

2024 4/1~4/10

2024 4/21~4/25

2024 5/11~5/20

カツオQRY (ℓ)

eDNA Copies/ℓ

カツオQRY (ℓ)

伊豆・小回遊ル

伊豆・小笠原回遊ルート

伊豆・小笠原回遊ルート

ビンナガ回遊経路予測 ~水温構造による移動経路予測~

近海かつお一本釣漁場形成状況(5-7月)

【2023年5-7月】

- 三陸~房総沖で局所的ビンナガ漁場が形成
- ビンナガ漁場(青丸)は東西に狭い範囲に集中
- ビンナガが東へ移動しなかったことを示す

-100m水温とビンナガ漁場形成状況(5/15~7/3)

2023/5/15 2023/5/29 2023/6/12 2023/6/26 2023/7/3

○漁場位置の水深-100mでビンナガ好適水温(18.5~19.5℃)と一致→ビンナガの生息水深と推定
○巾着状の水温構造から東に移動できなかった理由を推察

特定水深の水温構造から
ビンナガ回遊ルートを推定できる可能性

ビンナガ回遊経路予測 ~まぐろはえ縄漁獲データ分析~

○ビンナガは東西渡洋回遊し、1月頃日本近海に出現
○かつお一本釣以前の時期はまぐろはえ縄で漁獲

2025年 1/1-2/10

【海嶺分布パターン】

- 東方海域から日本近海に来遊
- 海嶺の辺縁部に集中
- 100mの好適水温海域とは不一致
→分布域の水温は高い傾向
→より深い水深に分布

2025年 2/11-4/15

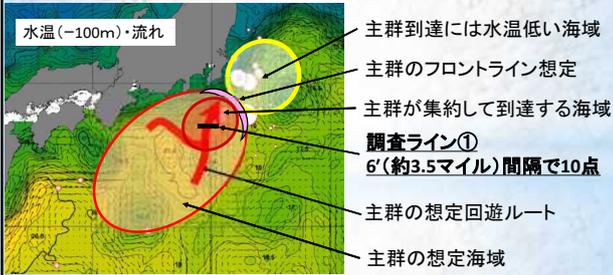
【海盆分布パターン】

- 日本近海(中南海域)に滞留
- 四国海盆を中心とした分布に変化
- 100mの好適水温海域と一致
→水深100m付近に分布

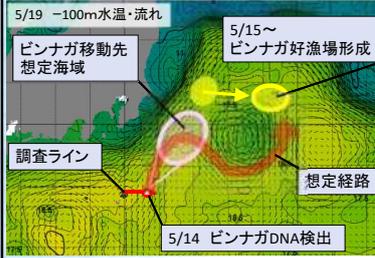
ビンナガ回遊経路予測の実際と調査ラインの設定

-100mの水温・流れを用いて回遊経路を予測

- ビンナガの好適水温海域を中心に種群が存在するエリアを予想
- 海盆分布パターン後期に海流に沿った分布パターンとなることから、移動経路を海流主体に想定



【成果と波及効果】 環境DNAによるビンナガ来遊調査の実際(2025.05)



- 5/14に1点からビンナガDNAを検出
- 即日、今後の想定海域を関係漁船に情報提供
- 翌日以降、隣接する海域でビンナガ好漁場が形成
- 同海域で、宮崎県籍船が約1週間でビンナガ814t、3億円超の水揚げ

- #### 【波及効果】
- 本調査の成果利用により、かつお一本釣のスムーズな漁場転換が実現
 - 不要な探索経費の節減、ビンナガ漁獲の機会損失を防ぐことが可能
 - もって、効率的な経営を実現し、持続的かつお一本釣漁業の操業形態を構築

まとめ

【成果】

- 過去9年間の環境DNA調査及び関連研究を集積
- ビンナガの来遊把握を標的とした調査スキームを構築
- 調査船みやざき丸を用いた環境DNAによる実践的調査を開始
- ビンナガDNAの検出に成功するとともに、漁場形成による裏付けデータが得られた

【新たに生じた課題と対応】

- (1) 外洋域での対象DNA検出の難しさ
→新たなサンプリング手段としてパッシブサンプリング手法導入を検討
- (2) 調査実施の頻度、タイミング
→事前予測検討の精度向上
- (3) 関係業界の調査への理解醸成
→根強く協議、説明の実施、実践成果の積み上げ



会長賞受賞者記念講演

マボヤの貝毒対策に関する研究

宮城県水産技術総合センター 気仙沼水産試験場

主任研究員 田邊 徹

【背景と目的】

宮城県沿岸では、春季に麻痺性貝毒、春季から夏季にかけて下痢性貝毒が発生、しばしば濾過食性生物が毒化し産業上大きな影響を及ぼす。このうち、ホタテガイについては貝毒成分が主に蓄積される中腸線を除去する処理加工を行い、無毒化を図ることで貝毒の発生期間中でも水揚げができるルールを整備し運用されている。貝毒の発生期間はマボヤ出荷の盛期であり、この期間の貝毒による出荷自主規制措置は産業上非常に影響が大きい。本研究は、これまで十分に知見のなかったマボヤにおける麻痺性貝毒及び下痢性貝毒の毒成分の器官偏在を明らかにし、処理加工による無毒化の可能性について検討することを目的とした。

【内 容】

宮城県沿岸でマボヤが下痢性貝毒により毒化した 2017 年及び麻痺性貝毒により高毒化した 2020 年に、それぞれ宮城県気仙沼市階上地先及び女川町塚浜地先において養殖されていたマボヤをサンプリングし、経時的に器官ごとの毒成分の含有量を分析した。その結果、下痢性貝毒については期間を通じて肝臓のみで検出され、麻痺性貝毒については他の二枚貝類と比べ日ごとの減衰率が高いこと、また特に高毒化期では 80%以上の毒成分が肝臓に偏在していることを明らかにした。

【成果と波及効果】

これまで知見が十分になかった貝毒毒化期間中における毒成分の器官偏在を明らかにし、肝臓除去により無毒あるいは減毒化が図れることを明らかにした。このことにより、今後マボヤの貝毒毒化期間中において処理加工により出荷できる可能性を示した。マボヤにおける貝毒成分の器官偏在や、毒化特性等については別紙 4 報の公表論文にまとめた。

マボヤの貝毒対策に関する研究

宮城県水産技術総合センター 気仙沼水産試験場
課代表者 主任研究員 田邊 徹

令和7年11月18日 令和7年度全国水産試験場長会

- マボヤ *Halocynthia roretzi* は脊索動物門尾索動物亜門ホヤ綱に分類され日本各地の他、朝鮮半島、山東半島などに分布
- 3日程度の浮遊生活の後、附着性、濾過食性
- マボヤは主に北海道、青森県、岩手県、宮城県で養殖(一部は漁獲(潜水、底曳等)もある)
- 主な漁期は春期～夏期
- 最大の輸出相手国である韓国への輸出が停止、国内消費の拡大が重要

下痢性貝毒について

原因生物	ディノフィシス属
主な症状	下痢、腹痛、嘔吐。死亡事例はない。
発生期間	本県の場合6月～8月
発症量	ヒトの最小発症量は約30μg
潜伏期間	食後30分程度
出荷規制	可食部1kgあたり0.16mgOA当量*を超えた場合

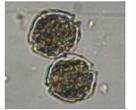


1/15mm
ディノフィシス・フォルティ
Dinophysis fortii

※OA当量 (オカダ酸当量)
OA群 (オカダ酸および同族体のDTX(ジノフィストキシン)群) に含まれる物質を毒性の強さに応じてオカダ酸の量として換算した総毒量
プランクトンの出現要因と震災以降の変化
・津軽暖流や親潮の南下・沿岸など海流や気候との関わりが大きいとされる。
・ほぼ毎年発生し、広範囲 (複数海域) で発生することもある。
・震災による影響は見られていない。
※ マボヤの毒化報告はあるものの、本県ではマボヤでの規制はない。

麻痺性貝毒について

原因生物	Alexandrium属
主な症状	しびれ、まひ、言語障害 重度の場合は呼吸麻痺で 死亡
発生期間	本県の場合1月～6月
発症量	3,000～20,000MU (体重60kgの人)
潜伏期間	食後30分程度で軽度の麻痺が始まる
出荷規制	可食部1gあたり4MUを超えた場合*



1/30mm
アレキサンデルリウム属
Alexandrium.spp 沿岸性のプランクトン

※マウスユニット (MU) 20gのマウスを15分間で死亡させる毒量を1MUとする。
プランクトンの出現要因と震災以降の変化
・休眠胞子(シスト)の分布、環境要因による。
・湾ごとに発生状況が異なる。
・震災以降増加傾向にあり、津波によるシストの巻上、海洋環境等が要因で貝毒発生動向に変化が生じたのではないかと推測される。
※ 2020年以降本県ではマボヤの自主規制が頻発している。

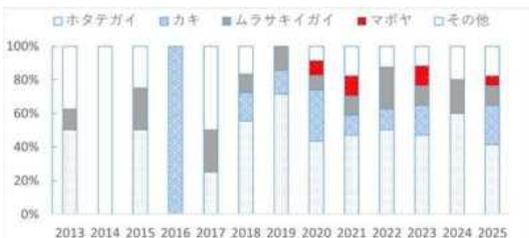
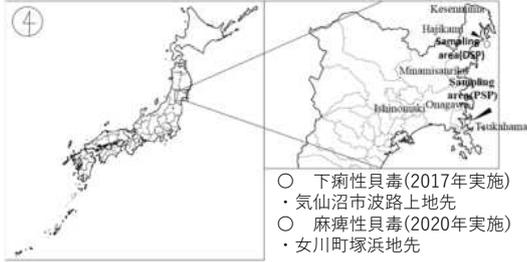


図 宮城県中北部海域で麻痺性貝毒の出荷自主規制件数に占めるそれぞれの貝種の割合
・ 2020年以降、マボヤの規制が多く発生している。

- 下痢性及び麻痺性貝毒の発生時期はマボヤの水揚げの最盛期である。
- ホタテガイではルールに基づき貝毒成分が蓄積する中腸腺を除去しての出荷が可能
- マボヤは下痢性及び麻痺性貝毒により毒化する
 - **下痢性貝毒：規制実績はないが、潜在的なリスク**
 - **麻痺性貝毒：2020年以降、頻繁に発生、対策が課題**
 - ・ 毒の器官偏在を示す予備的な分析結果はあるもの…
 - 貝毒発生期間を通した報告はなく、安全管理としては不十分
 - マボヤでの処理加工による貝毒の減毒化が可能ということになれば、加工原料としての利用が増え加工品の国内流通が促進**

○ 調査地点及び試料採取



- 下痢性貝毒(2017年実施)
 - ・気仙沼市波路上地先
- 麻痺性貝毒(2020年実施)
 - ・女川町塚浜地先

※ムラサキガイとマボヤは同じ海域でサンプリング、比較を実施

○調査・毒化傾向把握

▶1~4回/月で環境調査及びプランクトン出現状況調査を実施

▶毒化傾向について把握

(麻痺性貝毒についてはマウスアッセイによる貝毒モニタリング結果(マウスアッセイ)についても活用)

○貝毒成分の機器分析と器官偏在

▶マボヤの機器分析は解剖後体内の器官に分けて実施

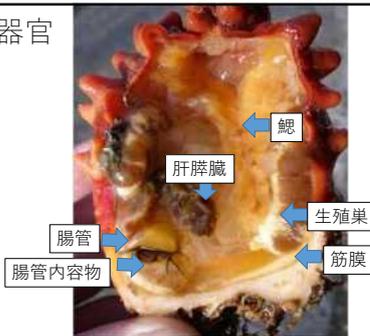
・器官：筋膜、鰓、肝臓、腸管、腸管内容物 → LC-MS/MSで分析※

下痢性貝毒：15~20個体をまとめて分析

麻痺性貝毒：個体ごと5個体の分析(分析①), 10個体まとめて分析(分析②)

※共同研究機関：宮城県保健環境センター(麻痺・下痢), 国立研究開発法人水産研究・教育機構水産技術研究所(麻痺) において分析

マボヤの器官



下痢性貝毒に関する成果

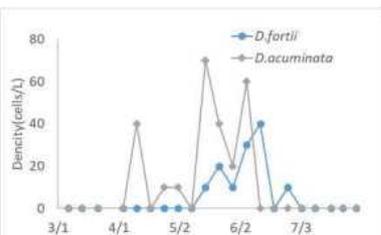


図 2017年の Dinophysis 属プランクトンの出現状況
D. acuminataは4月から6月, D. fortiiは5月の2週目から確認, 7月には何れも確認されず

○ 下痢性貝毒

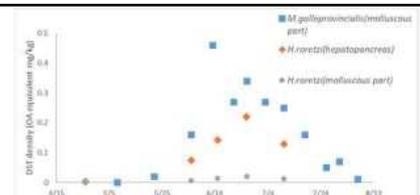


図 下痢性貝毒毒量の推移

- ・ムラサキガイ(可食部)については5月の下旬から毒性分が検出, その後増加
- ・マボヤは期間中肝臓のみで毒が検出
- **肝臓に蓄積される(二枚貝の中腸線と類似)**
- ・マボヤ(肝臓)毒量の推移はムラサキガイと類似し D. fortii の出現状況に応じて毒量が増加
- **D. fortii を主要因として毒化**
- ・マボヤの可食部換算値(肝臓を含む軟体部全体に換算)は極めて低い。

表 毒の成分別検出状況

	date	total	OA	DTX1	DTX2	OA/total
H.roretzi	6/5	0.07	0.03	0.05	ND	0.36
	6/15	0.14	0.08	0.06	ND	0.55
	6/26	0.22	0.11	0.11	ND	0.50
	7/10	0.13	0.08	0.05	ND	0.59
M.galloprovincialis	6/5	0.16	ND	0.16	ND	0.00
	6/13	0.46	ND	0.46	ND	0.00
	6/21	0.27	ND	0.27	ND	0.00
	6/26	0.34	ND	0.34	ND	0.00
	7/3	0.27	ND	0.27	ND	0.00
	7/10	0.25	ND	0.25	ND	0.00
	7/18	0.16	ND	0.16	ND	0.00
	7/26	0.05	ND	0.05	ND	0.00
	7/31	0.07	ND	0.07	ND	0.00
	8/7	0.01	ND	0.01	ND	0.00

マボヤ：OAとDTX1で比較的OAの割合が高い
ムラサキガイ：DTX1のみ

※ 分析毒種
DTX1 国内では下痢性貝毒の主毒種
DTX2 国内では未報告
OA 下痢性貝毒の毒薬で割合は低い

※このほかDTX3があるが、加水分解されるためDTX1やDTX2として検出される。

表 過去の下痢性貝毒検出状況

	date	total	OA	DTX1	DTX2	OA/total
Mizuhopecten yessoensis	2016/6/13	0.64	0.01	0.63	ND	0.02
Mizuhopecten yessoensis	2016/6/13	0.54	0.01	0.53	ND	0.02
Mizuhopecten yessoensis	2017/6/13	1.1	0.02	1.1	ND	0.02
H.roretzi	2017/6/19	0.09	0.02	0.07	ND	0.22
Mizuhopecten yessoensis	2017/6/19	0.78	0.02	0.76	ND	0.03

2016年に貝毒の検査方法が現行の機器分析に変更
2018年末までに県内で1889検体の検査を実施
内499検体で毒を検出
OA(オカダ酸)が検出された検査は5例で(ホタテガイが4例、マボヤが1例)
マボヤだけが突出してOAの割合が高い

ホタテガイ：2~3%
マボヤ：22%

貝毒の蓄積や代謝が軟体動物と原索動物で異なる可能性

麻痺性貝毒に関する成果

Nippon Suisan Gakkaishi 91(4), 343-351 (2025) DOI: 10.2331/nippon.24-00042

マボヤ *Holocynthia roretzi* における麻痺性貝毒の器官偏在

田邊 龍^{1,2} 渡邊 隆^{1,2} 前田 達成¹ 松崎 直次¹
内田 隆¹ 小澤 善也¹ 千葉 美子¹ 鈴木 隆子¹
岡村 悠子¹ 阿部 修久¹ 田野 龍¹ 鈴木 敏之¹

(2024年12月17日受付、2025年4月18日発行、2025年7月31日J-STAGE専攻発表)

「宮城県水産試験場センター」及び「宮城県水産試験場」で実施された麻痺性貝毒に関する研究結果を報告する。研究機関は「宮城県水産試験場」である。

These distribution of paralytic shellfish toxins (PST) in soft-shell *Holocynthia roretzi*
Yus. TANABE^{1,2}, Ryoji WATANABE^{1,2}, Tatsunori MAEDA¹, Naoki MATSUZAKI¹,
Ryoma UCHIDA¹, Miori OHYAMA¹, Yumiko KISHIMOTO¹, Yoko OKAMURA¹,
Noriko ABE¹, Kazuo NUMANO¹ AND Tomoyuki SUZUKI¹

¹Kanagawa Miyagi Prefectural Fisheries Experimental Station, Kanagawa, Miyagi 989-0242, ²Fisheries Technology Institute, Aomori Fisheries Research and Education Agency, Tsushima, Ehime-gun 776-8648, ³Miyagi Prefectural Health and Environmental Center, Sendai, Miyagi 981-8536, ⁴Miyagi Prefectural Environment and Lifestyle Department, Sendai, Miyagi 980-8571, ⁵Miyagi Prefectural Fisheries and Forestry Department, Sendai, Miyagi 980-8576, ⁶Miyagi Prefectural Government Agency of Promotion Office, Kanagawa, Miyagi 989-0231, Japan

Amblyon *Holocynthia roretzi* is a very important aquaculture species on the coast of Miyagi prefecture.

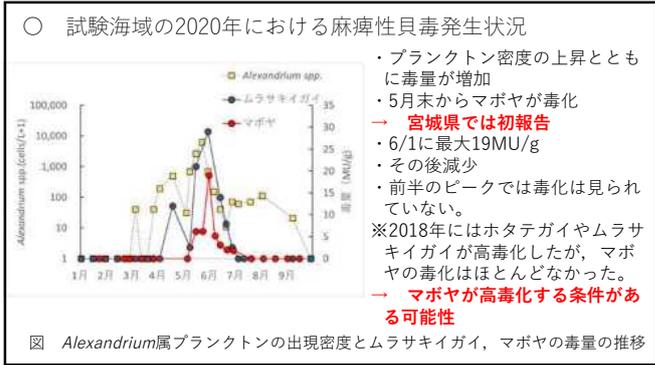


表 種ごとの麻痺性貝毒の減衰率(%/day)

種名	減衰率 (%/day) 近似式(P ₀)	R ²
A ムラサキガイ	7.3% P ₀ =P ₀ (1-0.073) ⁿ	0.96
B	6.2% P ₀ =P ₀ (1-0.062) ⁿ	0.98
ムラサキガイ平均	6.7%	
C アカザラガイ	1.7% P ₀ =P ₀ (1-0.017) ⁿ	0.80
D ホタテガイ	2.5% P ₀ =P ₀ (1-0.025) ⁿ	0.86
E	3.2% P ₀ =P ₀ (1-0.032) ⁿ	0.93
F	4.2% P ₀ =P ₀ (1-0.042) ⁿ	0.94
ホタテガイ平均	3.3%	
G マボヤ	7.9% P ₀ =P ₀ (1-0.079) ⁿ	0.92
H マボヤ	14.5% P ₀ =P ₀ (1-0.145) ⁿ	0.95

図 種ごとの麻痺性貝毒の曲線

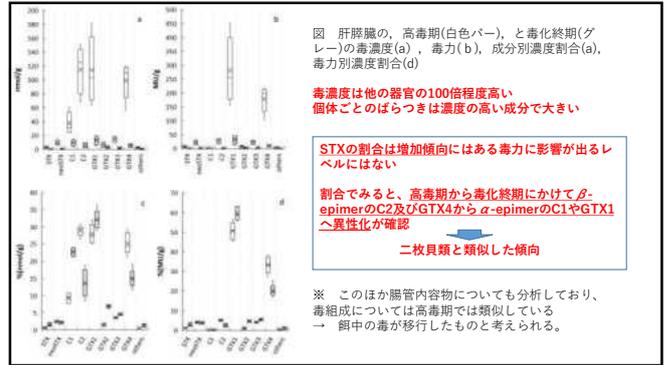
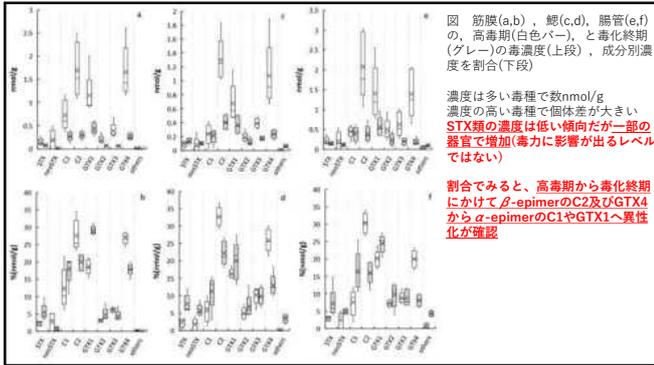
マボヤの毒量の減衰率は比較した中では最も高い
→他の二枚貝類と比較して抜けやすい種類

分析1：高毒期と毒化終期の個体別分析による毒成分の比較

分析した毒素	
主要な毒成分	その他の毒としてまとめて比較
C1	GTX5
C2	GTX6
GTX1	dcGTX2
GTX2	dcGTX3
GTX3	dcSTX
GTX4	dcneoSTX
neoSTX	
STX	

・ 器官による違いの把握
・ 個体差の確認
・ 毒組成の比較→異性化等について確認*

*二枚貝などではSTXが増加し、高毒化する種もある。

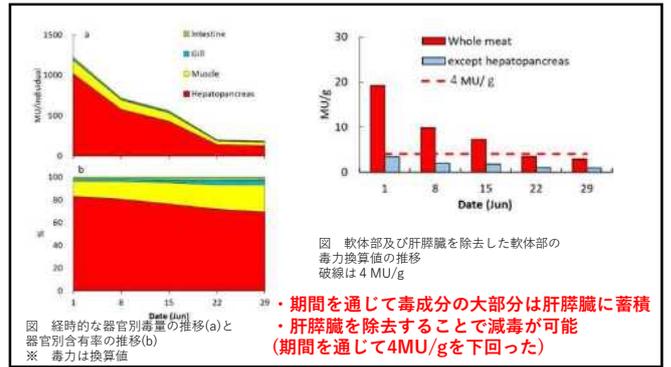


分析2：毒成分、毒濃度の経時変化 (10個体まとめて分析)

- 経時変化の確認
- 肝臓の蓄積状況の推移の確認
- 比毒性によりMU換算して比較

*STX類は分析せず(分析1でSTXの全体への影響度は高いことを確認)

分析した毒素	
主要な毒成分	その他の毒としてまとめ比較
C1	GTX5
C2	GTX6
GTX1	dcGTX2
GTX2	dcGTX3
GTX3	
GTX4	



まとめ

- 下痢性貝毒
 - 毒化についてはムラサキガイ等と同じ*D.fortii*を主因として毒化
 - 毒の成分は期間を通じて肝臓に偏在
 - **肝臓除去による減毒加工ができる可能性**
 - 他の二枚貝類と比べOAの含有率が高い
 - 分類群による代謝経路が異なるなどがある可能性
- 麻痺性貝毒
 - 体内の毒成分の異性化などは他の二枚貝類と類似する。
 - 毒濃度の個体間のばらつきは、濃度の高い毒成分で大きく、検査については十分な個体数を用いる必要がある。
 - 期間を通じて全毒量の70~80%の毒成分が肝臓に蓄積され、今回の研究結果では高毒期でも肝臓を除去することで基準値の4 MU/gを下回った。
 - **肝臓の除去による減毒加工ができる可能性**

貝毒発生時期にホタテガイと同様のルールを設定することで、処理加工を前提とした水揚げができる可能性が示された。

研究分担者紹介

宮城県保健環境センター
千葉美子, 新貝達成, 大内亜沙子, 佐藤智子, 鈴木優子
下痢性貝毒の分析及び麻痺性貝毒の分析にご尽力いただきました。

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
水産技術研究所 環境・応用部門 水産物応用開発部
渡邊龍一, 松嶋良次, 内田肇, 小澤真由, 沼野聡, 鈴木敏之
麻痺性貝毒の分析にご尽力いただきました。

宮城県水産技術総合センター
岡村悠梨子, 阿部修久, 増田義男
同 気仙沼水産試験場
濫谷和明, 庄子充広, 藤田海音, 他力将
下痢性貝毒及び麻痺性貝毒の調査研究に協力いただきました。

敬称略、当時の所属で紹介しています

公表論文

- 田邊徹, 千葉美子, 渋谷和明, 庄子充広, 大内亜沙子, 佐藤智子. 下痢性貝毒によるマボヤ *Halocynthia roretzi* の毒化と毒の器官偏在. 日本水産学会誌 2020, DOI: 10.2331/suisan.20-00006
- 田邊徹, 藤田海音, 増田義男. 2020年に宮城県沿岸で発生した麻痺性貝毒によるマボヤの毒化と毒の減衰特性. 宮城県水産研究報告 2021; 21: 31-36.
- 千葉美子, 新貝達成, 鈴木優子, 他力 将, 田邊 徹. マボヤの麻痺性貝毒分析法の検討. 宮城県保健環境センター年報2021; 39: 49-52.
- 田邊徹, 渡邊龍一, 新貝達成, 松嶋良次, 内田肇, 小澤真由, 千葉美子, 鈴木優子, 岡村悠梨子, 阿部信久, 沼野聡, 鈴木敏行. マボヤ *Halocynthia roretzi* における麻痺性貝毒の器官偏在, 日本水産学会誌2025, DOI: 10.2331/suisan.24-00042

会長賞受賞者記念講演

網走湖の塩分環境保全とヤマトシジミ資源の回復

北海道立総合研究機構 網走水産試験場

主査 渡辺智治

【背景と目的】

網走湖のヤマトシジミは地理的表示（GI）が認められた重要な地域資源となっている。網走湖は汽水湖であり、水質が非常に不安定である。湖水環境の安定化のため、国土交通省は湖下流に塩水遡上抑制装置（可動堰）を設置・運用している。ヤマトシジミの生産は1991年以降、年間600から900トン程度で推移していた。しかし、2023年には258トンに減少し、湖水環境変化の影響が指摘されていた。そこで、網走湖におけるヤマトシジミ資源の持続的生産を図るべく、湖水の塩分環境がヤマトシジミの再生産と生残に与える影響の解明と塩分環境の人為的創出による資源回復の実証的な調査研究が進められた。

【内容】

長年、ヤマトシジミの浮遊幼生密度調査、資源調査を実施し、あわせて湖水塩分と産卵、越冬減耗、及び成長の関係を実験的に検証してきた。その結果、2016年以降、産卵がほとんどなく、資源量が減少傾向にあることを把握し、湖の上層の低塩分化がこの原因と結論した。その旨を関係者に提示し、可動堰の順応的運用（海水流入量の増加）が実施される契機となった。これにより、塩分が上昇し、2019年、2020年に大規模な浮遊幼生の出現が確認され、2022年以降は資源量が回復傾向を示している。

【成果と波及効果】

本研究により網走湖ヤマトシジミについて産卵と生残に必要な塩分が把握されて適正な塩分が提示された。本成果に基づき堰が順応的に運用されて塩分が上昇したことで、大規模な産卵が起きて資源が再生する効果を検証できた。新たに生まれた資源は、2024年には一部出荷サイズまで成長した。今後、漁獲量の回復が確実視されており、年間600～900トン程度（概ね5.4～8.1億円）の漁業生産量が見込まれている。

2025(R7)年11月18日

2025(R7)年度 全国水産試験場長会
表彰審査委員会プレゼンテーション資料

【業績名】網走湖の塩分環境保全と シジミ資源の回復

【業績関連研究課題(事業)】北海道立総合研究機構
経常研究

【実施年度】2010(H22)～2025(R7)年度

【所属】北海道立総合研究機構 網走水産試験場

【研究者名】渡辺 智治

内容

【背景】網走湖水と塩水遡上抑制施設[堰]の運用

【目的】網走湖の塩分環境適正化、シジミ資源持続のため、
湖水の塩分環境がシジミ資源に及ぼす影響を解明する

【内容】

1. 網走湖シジミの減少要因に関する研究

I. 産卵

II. 生存

2. 提言

3. 堰運用前後の推移

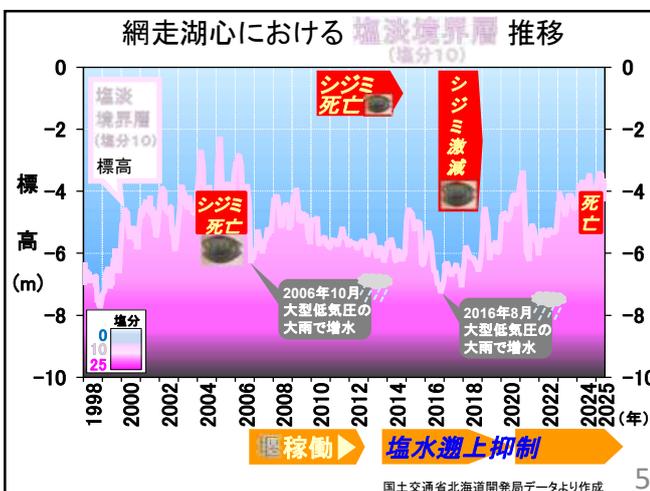
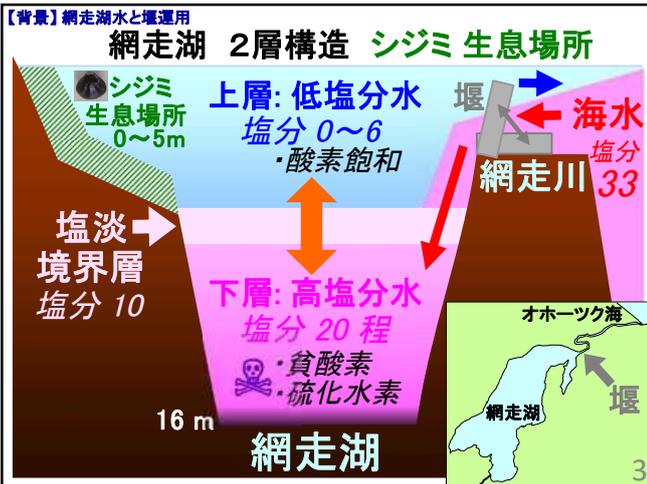
4. 成長研究

ヤマトシジミ
(シジミ)



【成果と波及効果/まとめ】

2



【成果】

1. 網走湖シジミの減少要因に関する研究

下降する場合 塩分低下

塩淡水境界層

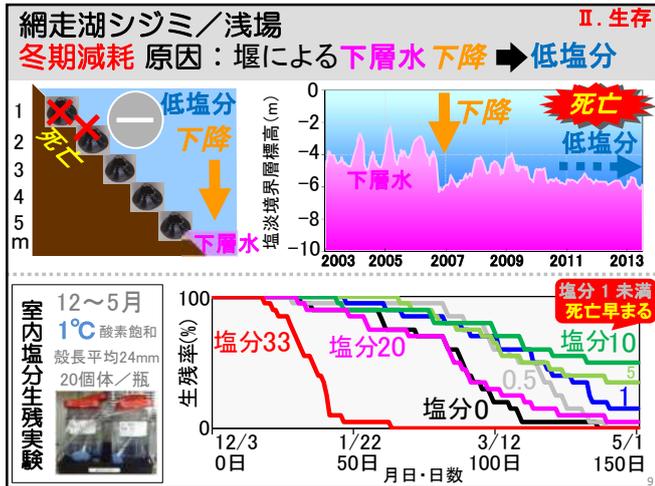
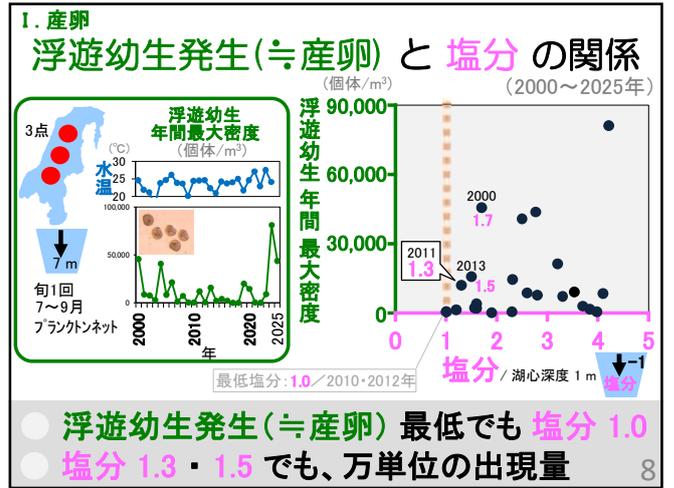
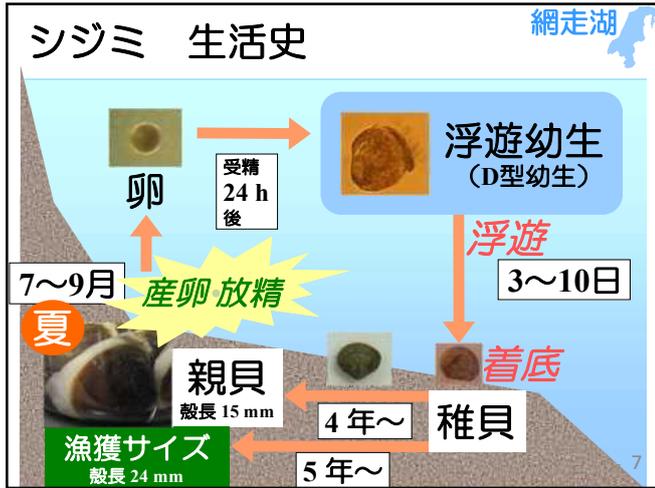
下層水

網走湖 シジミ

I. 産卵

II. 生存

6



2. 提言

北海道立総合研究機構 水産試験場からの提言

HRIO 2012(H24)年 第4回

網走湖塩淡水境界層制御施設モニタリング検討会

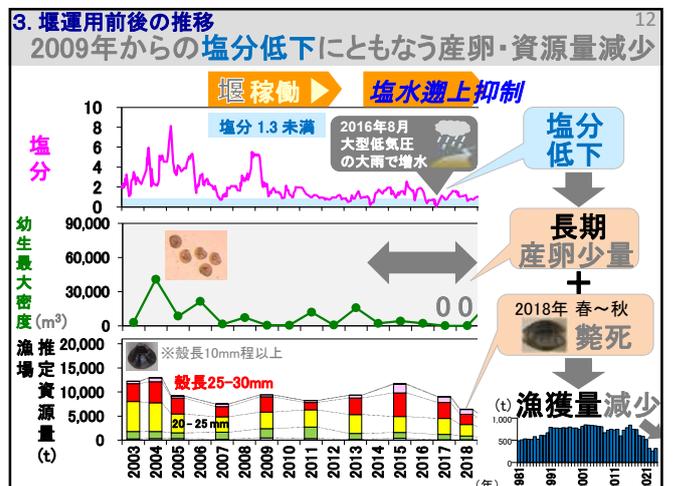
／国土交通省 北海道開発局

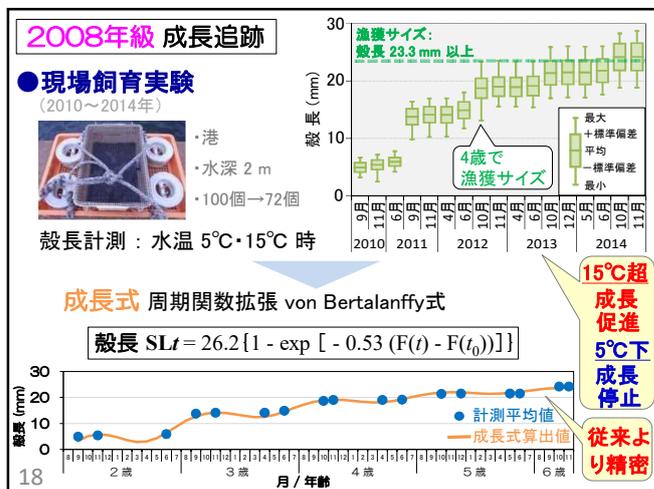
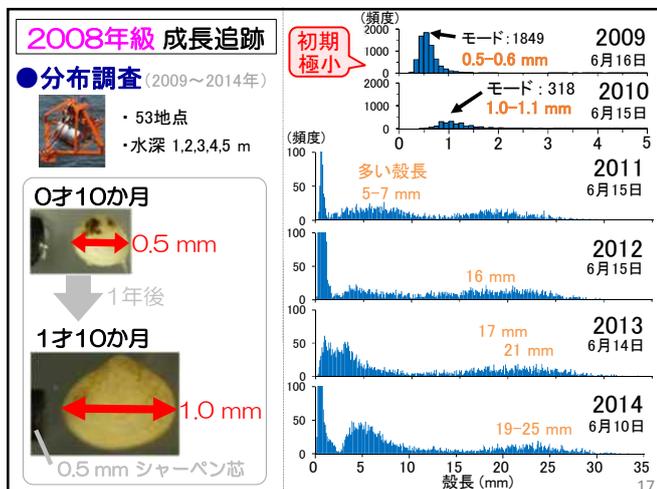
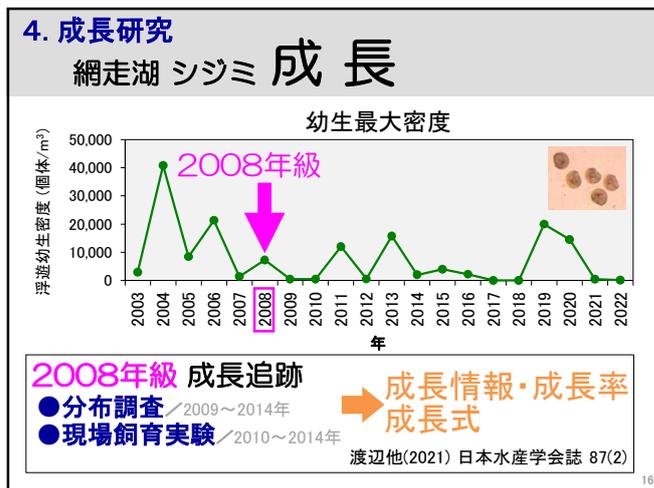
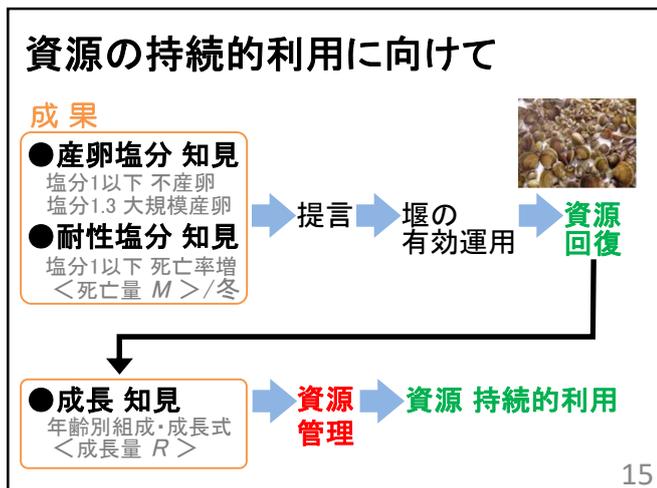
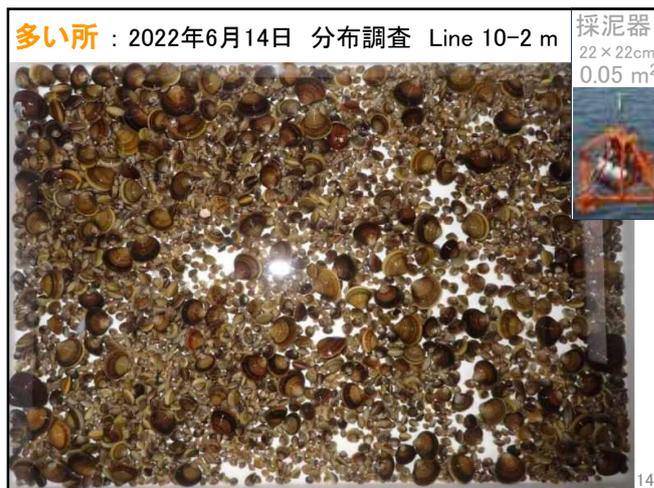
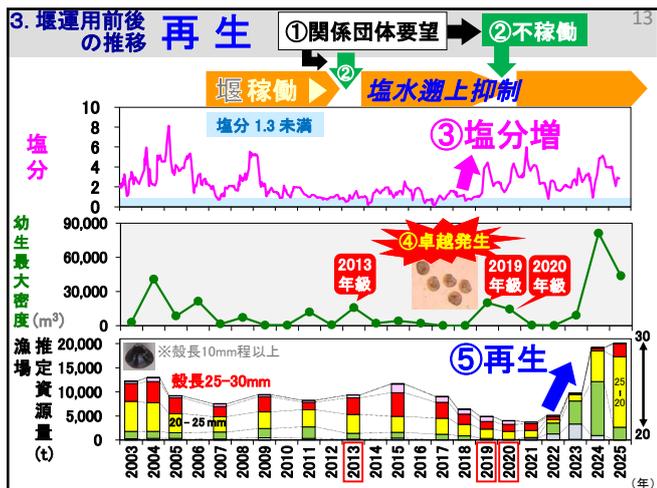
- ① 網走湖シジミの産卵には 塩分1.3~2.0psu以上が必要
シジミ体内塩分10 (中村, 1999) “環境水の塩分が10より低いと浸透圧調節必要”
- ② 網走湖上層(シジミ生息域)の塩分を冬期と、特に春期の雪解け水流出後に適正にするため、塩淡水境界層制御施設(堰)の順応的管理が必要

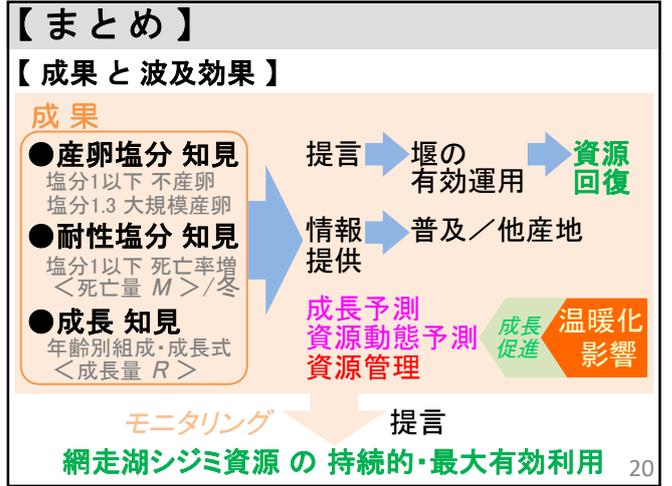
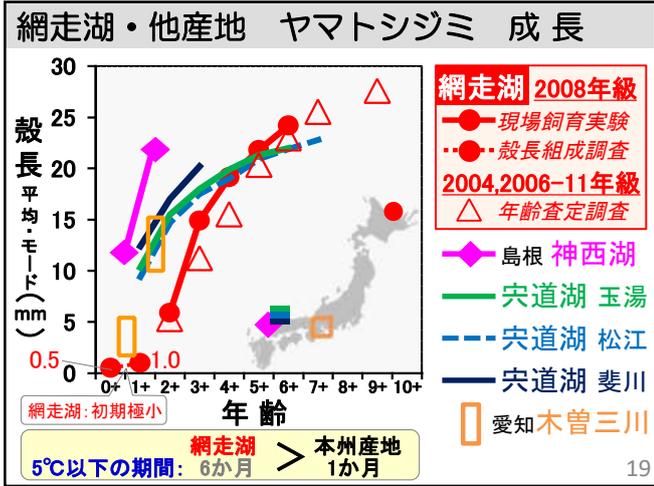
状況に応じて 堰 不稼働 (冬期海水流入) 10

網走湖 堰の稼働期間の違い

	12月	1月	2月	3月	4月
【通常年度】 2005~2011年度 2013~2017年度 2020~2024年度	12~2月 → 2~3月				
2012年度/2013年	周年不稼働				
2018年度/2019年	[稼働期間]				
2019年度/2020年	[稼働期間]				







7 日本水産学会・全国水産試験場長会 合同シンポジウムについて

(北海道立総合研究機構 水産研究本部長) 星野 昇

星野でございます。全国水産試験場長会では、各県が抱える懸案事項を取りまとめ、水産庁や水研機構に提出するという大きな流れとして行っておりまして、本日の午前中にも幹事会として今年度の課題について文書整理等を行ったところです。

水産学というものは、現場や研究者が抱える悩みや問題を解決する総合サイエンスであり、まさに我々が普段現場で仕事をしている上で直面している問題や、行き詰まっているテーマをアカデミアと共有することが、総合的に検討していく際の非常に大きな手掛かりになるのではないかと考えております。

かねてより水産学会から合同シンポジウム開催のお誘いをいただいていた経緯があり、本年度第1回(5月)の幹事会において検討し、「やりましょう」という方向で進めてきたところです。

その後、いろいろと検討を重ね、この資料でございます通り、令和8年3月26日に水産学会春季大会の理事会シンポジウムとして開催することとなり、実施内容も固まりつつあります。今月29日の水産学会理事会で最終的な承認を得て進める予定です。

当日は、東海先生と大村会長にご挨拶いただき、東海先生からご講演をいただきます。また、地域の水産研究の現状と課題について私から説明させていただき、その後、事例紹介として地域が抱える懸案事項のうち象徴的な研究事例4題を発表していただく予定です。

総合討論に関しては、幹事会の議論では、今後こうした地域の課題に対して成果を上げていく人材を学会も含めてどのように育てていくかという視点で話をしております。決定ではありませんが、東海先生と相談しているところです。

ぜひ、皆様および職員の皆さまにも積極的なご参加をよろしくお願いいたします。東海先生、補足があればお願いいたします。

公益財団法人 日本水産学会 会長 東海 正

星野副会長、どうもありがとうございました。私が会長になりまして、ずっとこのようなシンポジウムを開催し、水産学会、大学の研究所・研究機関、それから水産試験場の方々と一緒になって水産に関する課題に取り組むことを目指してまいりましたので、ようやくその第一歩ということで、シンポジウムをかなり無理を言ってお願いし、ここまでたどり着いた次第でございます。

この件については、9月の水産学会理事会において開催することが承認されております。今回の11月の理事会には、これについてそれぞれコメントをいただける水産学会

の理事、あるいは水産学会各懇話会、その他水産学教育推進委員会等の委員会がございますので、それと関連する先生方にコメントを出していただくなどのやり取りを行いながら、このシンポジウムの次に、そういった懇話会あるいは各委員会で、業界の問題としてシンポジウムや講演会を開催し、より深く議論を深めていけるような道筋を考えているところでございます。

もう一つ、先日副会長と打ち合わせをした際に、水産学会の総務担当理事を務めている吉崎先生が若手の会の担当をしております、彼のアイデアなのですが、これはぜひ学部の学生たちに聞かせたい、しかも1年生ぐらいから聞かせてやりたいという話をしていました。これはオンラインで無料で聞けるように、海洋大を会場として学生にも参加してもらい、こういった課題に取り組んでいる姿を学生たちに見せて、課題解決に取り組みたい意欲のある学生を育てていきたいと考えております。

ぜひこれに関しては、水産試験場の職員の皆様方がオンラインで参加できるようにしますので、ご参加いただき、ぜひご意見などを出していただければと思います。よろしくお願いいたします。

日本水産学会・全国水産試験場長会、合同シンポジウムについて

全国水産試験場長会 副会長（企画） 星野（北海道 BL）

全国水産試験場長会では、日本全国の地域が抱える水産に関する課題を取りまとめている。課題は資源管理、環境変動、増養殖、魚病防疫など広い分野に及ぶ。それらの課題解決には、地域の研究者による現場での地道な調査研究はもとより、専門的な知識、技術を有する多くの研究者が参画した学際的な研究を、現場で活用できる技術につなげていく必要がある。日本水産学会では、学術の発展と科学技術の振興に寄与することを目的として、水産学に関する学理及びその応用の研究についての発表及び連絡、知識の交換、情報の提供等の事業を行ってきた。この度、日本水産学会からの積極的な要請もあり、水産に関する地域の課題を広く情報共有して、今後の取り組みの方向性について意見交換を行うため、以下のシンポジウムを企画している。会員・貴所職員の積極的な参加をお願いしたい。

地域の課題に立ち向かう水産学のこれから（仮題）

日時・場所：令和8年3月26日（木）13:00～17:30 東京海洋大会場+ZOOM

企画責任者：東海 正（海洋大・日本水産学会 会長）・星野 昇（道中央水試・全国水産試験場長会 副会長）・木村 稔（道総研・日本水産学会 理事）

13:00－13:05 開会の挨拶 東海 正（東京海洋大・日本水産学会 会長）
 13:05－13:10 趣旨説明 大村英二（宮崎水試・全国水産試験場長会 会長）

I 講演

1. 水産業における研究と技術開発の必要性—これまでの理事会シンポの振り返り
東海 正（海洋大・日本水産学会 会長）
2. 地域の水産研究の現状と課題（レビュー）
星野 昇（道総研・全国水産試験場長会 副会長）

II 事例紹介

1. 資源管理体制の高度化に関する事例
宮崎県水産試験場
2. 養殖業の成長産業化に関する事例
香川県水産試験場
3. 有害・有毒プランクトンによる漁業被害対策に関する事例
北海道立総合研究機構
4. 内水面における加害生物対策に関する事例
滋賀県水産試験場

III 総合討論

8 その他 意見

徳島県立農林水産総合技術支援センター 山本 浩二

貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございます。徳島県水産研究課の山本と申します。本日は、議題の直接のお話ではありませんが、徳島県から調査船に関連する協力要望や情報共有についてお話しさせていただきます。

本県では、現在の調査船がすでに船齢 20 年を超えていることから、令和 4 年度に代船建造の入札を実施いたしました。当時はウクライナ戦争等の影響もあり、入札は不調に終わってしまいました。その際は、もう無理だと先延ばししておりましたが、本年度も 6 月に再度入札を行いました。しかし、またもや不調となり、さらに再度入札を行いました。人件費や資材の高騰が追いつかず、再び不調となった状況です。

このまま先延ばししても、人件費や資材の高騰により年間 10% 程度経費が値上がりしていること、また造船所の船台が 5 年先まで埋まっている状況であると聞いております。その中で、建造に向けて取り組んでいるところでございます。

こうした現状を水産庁にも知っていただく必要があると考え、本年 10 月に知事が財政支援などの協議を取り急ぎ行うことを内容とした要望書を水産庁に提出しております。現在、調査船業務は各県それぞれが実施している状況ですが、今後、各都道府県でも同様の問題が発生する可能性が十分あることから、知事からは調査船の共有・共同運用や、今後 10 年・20 年先を見据えた調査のあり方を検討するよう指示を受けております。

これまで場長会でも、このような議論が繰り返されてきたと伺っております。また、各都道府県の事情も異なることから難しい面も重々承知しております。しかし、海況情報の蓄積は非常に重要であると認識しており、効果的かつ継続的に続けられる体制が構築できればと考えております。

本県としては、近隣県と調査業務の情報共有を実施し、できることから検討していきたいと考えておりますが、全国的にも今後同様の問題が発生すると思われまので、国の方でもさまざまな検討をしていただければと考えております。

また、場長会としても来年度以降、そのような事について、徳島県からも提案させていただきます。予定です。

9 次年度開催県

秋田県水産振興センター 中林 信康

秋田県水産振興センターの中林でございます。三木場長をはじめ、香川県の皆様方には本大会開催の労をお取りいただき、誠にありがとうございました。

これからの意見交換会、また明日の視察まで、どうぞよろしくお願いいたします。

来年は秋田県が開催地となりますので、万難を排して準備を進めてまいります。ぜひ秋田にお集まりいただきますよう、よろしくお願いいたします。

10 現地意見交換会

(1) 日時

令和7年11月19日(水)8:30~12:00

(2) 場所

香川大学 瀬戸内圏研究センター 庵治マリンステーション(高松市庵治町)
金刀比羅宮(仲多度郡琴平町)

(3) 参加人数

59名

(4) 行程

08:30 栗林公園駐車場 出発

09:15 庵治マリンステーション (概要説明)

10:15 出発

11:00 JR高松駅

12:00 金刀比羅宮 到着

~解散~

15:00 金刀比羅宮 出発

※JR坂出駅・高松駅及び高松空港へそれぞれバスで送迎した。

11 関係写真

	
<p>ステージ</p>	<p>大会風景</p>
	
<p>大会風景</p>	<p>開会挨拶（会長）</p>
	
<p>来賓挨拶（水産庁）</p>	<p>来賓挨拶（水産研究・教育機構）</p>
	
<p>来賓挨拶（日本水産学会）</p>	<p>開催県挨拶（長野県）</p>



活動報告（会長）



情報交換（秋田県）



話題提供（香川県）



場長会会長賞表彰経過報告（北海道）



副賞贈呈挨拶（促進奨励会）



会長賞受賞（宮崎県）



会長賞受賞（宮城県）



会長賞受賞（北海道）



会長賞受賞者



記念講演（宮崎県）



記念講演（宮城県）



記念講演（北海道）



合同シンポジウム説明



次期開催県（秋田県）



現地意見交換会（庵治マリンステーション）



現地意見交換会（庵治マリンステーション）